The Universitas Review

紙面より

■構想・企画段階からの歩み (2・3面)
■「フードバンク茨城」が発足 (4面)
■台湾からの視察団受け入れ (5面)
■エネルギーの未来を考える (12面)
■「公園でお弁当」がブーム? (14面)

制作・発行 つくば市民大学
〒305-0033 茨城県つくば市東新井15-2
ろうきんつくばビル5階
tel 029(828)8891 fax 029(828)8892
e-mail info@tsukuba-cu.net
頒価:100円(税込)

つくば市民大学5周年

学園祭盛大に開催、さらなる飛躍誓う

14年3月29日、つくば市民大学の5周年を記念する学園祭が開催された。運営スタッフ・講座主催者・講座参加者の三者が実行委員会を構成して実現した「学びの祭典」に61名が集い、トークイベントやワークショップなどのステージ企画、体験型のブース企画など、多彩なプログラムを楽しんだ。

当日は、ビブリオバトルやラフターヨガ体験、絵本の読み聞かせ講座など8つのステージ企画、「カン単英単語力アップのコツ!」や「点字で遊ぼう&車イスでトイレに行こう」など7つのブース企画が並び、キャンパスは終日にぎわいを見せた。

筑波大学准教授・五十嵐泰正さんによる講演&ダイアログ「みんなで決めた『安心』のかたち」では、放射能汚染により「地・産・消」の信頼が分断された千葉県柏市における「安全・安心の柏産柏消」円卓会議の取り組みが紹介され、6年目を迎えるつくば市民大学の今後の取り組みに多くの示唆を与えるものとなった。

被災地へ希望つなぐ

支援物資の集積拠点担う

11年3月19日午前、ろうきんつくばビルの駐車場にパルシステム茨城の1・4トントラック2台が到着。つくば市民大学の呼びかけで集まった支援物資を積み込み、茨城県北茨城市と福島県いわき市の被災地へと向かった。

東日本大震災発災後の3月17日からメールやツイッター、ラジオなどで支援物資提供を呼びかけて2日目、260人を超える学生や市民らが毛布や衣類、食糧、生活用品などを持ち寄り、ボランティア・スタッフが仕分け・梱包作業を担った。

この活動は「希望をつなぐ」プロジェクトと名付けられ、その後4月10日までに、のべ1025人から段ボール箱換算で計1226個分の支援物資が寄せられた。〈関連記事2面〉

発達障害 就労へ一歩

「新しい公共」モデル事業実施

つくば市民大学を運営する市民団体ウニベルシタスつくばは12年度、県・市、NPO、株式会社など4団体に呼びかけ「つくば発達障害就労支援協議会」を構成、茨城県「新しい公共の場づくりのための提案型モデル事業」の一環として、発達障害のある若年層への就労支援モデル事業を実施した。訓練事業に参加した若者18名のうち2名が就職、6名が前向きに就職活動に取り組むなど、一定の成果を収めた。

協議会ではセミナー開催やリーフレットの発行などの啓発事業、計16団体による円卓会議の実施など、就労に関する包括的な事業に取り組むとともに、継続的な支援のネットワークも構築した。〈関連記事3面〉

ラジオドラマ 優秀賞を受賞

4ヵ月の連続講座で制作

11年12月、連続講座「防災ラジオドラマをつくろう!」を通して制作された作品が、防災科学技術研究所主催のコンテストで優秀賞を受賞した。「まつりつくば」の最中に大地震が発生したと想定し、災害弱者である聴覚障害者の避難誘導に必要なコミュニケーションのあり方を題材にしたこの作品は、参加者全員が、プロデューサー・監督・脚本家・キャスト・リサーチャーとしての働きを担い、約4ヶ月にわたって作りこんできた意欲作。参加者は「地域の人びとと連携しながら時間をかけて作り上げた作品が評価されてうれしい」と語った。〈関連記事3面〉

暁鐘

つくば市民大学の4つの学科にはそれぞれアイコンがある。コミュニティ学科は握手、ライフスタイル学科はコーヒーカップがモチーフになっている▼サステナビリティ学科はカエルだ。水質悪化や大気汚染などに敏感であるため、自然環境の豊かさを示す指標生物とされていることに因む▼ダイバーシティ学科は虹。構成色が連続的で明確な境界が引けないことから多様性の象徴となった。セクシャリティの多様性を象徴するものとして虹の旗が用いられることもある。国際協同組合同盟も虹の旗を用いるが、「統一性の中の多様性・多様性の中の統一性」を意味するという▼虹の色をいくつと捉えるかは時代や国によって異なる。現代の日本では一般的に7色とされるが、米国では6色と認識されることが多い。古代中国は5色、沖縄では明暗の2色と捉えていた▼何色と見るかは科学の問題ではなく、文化の問題である。違いを認め合うことが、豊かさへの第一歩である。

・企画段階からの歩み

11年度

（できごと）
・「防災ラジオドラマコンテスト」優秀賞
・フェイスブックページ開設
・第１回学園祭開催

（主な講座）
・防災ラジオドラマをつくろう
・ともに学び考えようエネルギーの未来
・特別講座（枝廣淳子さん）

44講座・127回、受講者1,128名
利用者1,668名

12年度

（できごと）
・「新しい公共」就労支援モデル事業実施
・台湾雲林県社区大学からの視察団来校
・４つのテーマによる学科制導入

（主な講座）
・フューチャーセッション「地域×アート」
・つくば市民活動・協働フォーラム
・里山入門

53講座・198回、受講者1,627名
利用者3,085名

13年度

（できごと）
・長崎県大村市からの視察団来校
・インターンシップ・プログラム開始
・「つくば公園でお弁当」スタート

（主な講座）
・はじめよう！伴走！
・スロー・シネマ・カフェ
・ロッキーと一緒にお買いものゲーム

66講座・203回、受講者1,661名
利用者2,310名

オープニングセレモニー　華々しく開催
記念講演は福嶋浩彦さん

ライブレコーディングを元にした対話も行われた

09年1月21日、「オープニングセレモニー＆記念フォーラム」が開催され、労組、生協、ＮＰＯ関係者、つくば市内外の市民ら50名以上が集まった。

第一部のオープニングセレモニーでは、海老沢政次さん（中央労働金庫茨城県本部本部長）の開会挨拶に続き、菊池正彦さん（自治労牛久市職員組合執行委員長）、圷明弘さん（日本労働組合総連合会茨城県連合会副事務局長）、斎藤義則さん（茨城ＮＰＯセンター・コモンズ代表理事）が挨拶。中央労働金庫総合企画部ＣＳＲ企画次長の山口郁子さんと、ウニベルシタスつくば代表幹事の徳田太郎から、これまでの経緯や初年度に予定されている事業が紹介された後、つくば環境フォーラム＋にれ工房の作製による看板が披露された。

第二部の記念フォーラムでは、前我孫子市長・中央学院大学客員教授の福嶋浩彦さんから「市民が創る地域社会～つくば市民大学への期待～」と題した記念講演があり、「自治体運営を健全なものにするためには、市民も自治の力を高めることが不可欠である。そのような『市民力』を高めるためには、違う意見、異なる利害関係を持つ市民同士がきちんと対話し、お互いに納得できる合意を自らつくり出すような場とプロセスが重要であり、つくば市民大学は、まさにそのような場として社会に求められている」とのエールが送られた。

その後、「私たちがつくる学びの場～つくば市民大学の可能性を語る～」と題したダイアローグが行われ、福嶋さん、山口さん、茨城ＮＰＯセンター・コモンズ常務理事・事務局長の横田能洋さんをパネラーに、会場との対話が行われた。

一日の締めくくりは、市内のオーガニック・レストランによる料理を囲んでの懇親会。つくば市民大学の記念すべきスタートを飾った。

支援通じ 新たなつながり
「希望をつなぐ」プロジェクト

「希望をつなぐ」プロジェクト開始直後から物資集積拠点となったつくば市民大学では、大勢のボランティア・スタッフが仕分け・梱包作業にあたり、支援の心を北茨城・いわきの避難所へと届けた。〈本文記事１面〉

支援物資は、多くのボランティア・スタッフが迅速かつ丁寧に仕分け・梱包し、茨城ＮＰＯセンター・コモンズやＮＰＯ法人フードバンク茨城が北茨城・いわきに輸送。北茨城での物資のコーディネートはＮＰＯ法人ウィラブ北茨城が、北茨城からいわきへの輸送と、いわきでの物資のコーディネートはうつくしまＮＰＯネットワークが担った。

ボランティア参加者は自主的に役割を分担し、「段ボールには４面全部に中身を書いた紙を貼るといいよ」「衣類は男女別、サイズ別に分けて梱包しよう」など、知恵を出し合い工夫を重ねながら効率よく作業を進めていった。

パルシステム茨城との協働で第一弾の物資を送り出した

４月10日までのプロジェクト期間中、のべ２２７名のボランティア・スタッフが市民大学に通い、仕分け・梱包・積み込み等の作業にあたった。この体験をきっかけに市民大学の運営や取組みに積極的に参加するようになった人も多く、そのつながりは現在も続いている。

出会いが「心の堤防」築く
福島乳幼児・妊産婦ニーズ対応プロジェクト

11年9月2日と11月23日、原発事故の影響で福島から茨城に避難されている子育て世帯が集まり、現状の生活や子どものこと、将来のことを語り合う場が設けられた。震災から半年、近くで生活しながらも同じ境遇の方との出会いもなく、孤立されていた参加者の皆さん。女性弁護士の参加もあり、身近なこと、法的な専門的なこと、さまざまな思いや不安が共有された。翌年３月８日の回では、偶然同じ小学校に子どもが通う避難者家族と支援者の出会いもあり、小学校を拠点とした当事者グループの発足につながった。

つくば市民大学 構想

07～08年度

（できごと）
- つくば市民大学構想開始
- 検討会　計31回開催
- ウニベルシタスつくば発足
- ウェブサイトオープン
- オープニングセレモニー開催
- 特別講座開催
  （玄田有史さん、宇都宮健児さん他）

つくば市民大学
まなぶ つながる つくりだす

09年度

（できごと）
- つくば市民大学オープン
- コミュニティジョブセンター茨城との連携
- カフェテラス・デー開催

（主な講座）
- 協働のためのファシリテーション
- 多文化共生講座
- フードバンク講座

29講座・127回、受講者1,396名
利用者1,795名

10年度

（できごと）
- 「ウニベルラジオ」放送開始
- トイレのバリアフリー化工事完了
- 「希望をつなぐ」プロジェクト実施

（主な講座）
- 団塊世代セミナー「地域デビューのススメ」
- 多様性に気づく、多様性を築く
- 万人のための「点字力」入門

45講座・84回、受講者970名
利用者2,715名

大震災の年 防災の思い新た
ラジオドラマコンテスト 優秀賞への道のり

幅広い世代の参加者が脚本づくりから取材・演出・出演まですべての過程に関わり、ラジオドラマコンテストで優秀賞を受賞した作品「わたしたちにできること」は、大型イベント時の危機管理マニュアルや災害弱者の避難誘導方法などの丁寧な取材や、地域の特徴が巧みに表現されている点が評価された。〈本文記事1面〉

誰もが「防災」「安全」について意識させられた11年、防災科学技術研究所主催の「防災ラジオドラマコンテスト」にあわせて、つくば市民大学では「まなぶ・つながる・つくりだす」というコンセプトを活かしてラジオドラマづくりに取り組んだ。参加者は小学生からシニア世代までの老若男女37名。9月3日の初回は「防災と私」というテーマで自己紹介。3・11を契機に防災意識が高まったとの声が多く聞かれた。

10月1日の第2回は企画会議。「まつりつくば」で大地震発生というスケールの大きな設定が決まり、これをもとに、つくば市観光物産課や言語聴覚士などに取材、正確なデータと知識を織り込んだシナリオ原案を作成した。11月5日の3回目はシナリオ原案を全員で推敲。修正の過程はホワイトボードやwebに掲示板などを使って「見える化」。常に最新の情報を共有し、意見やアイデアが反映されやすい仕組みをつくった。

12月3日の最終回はつくば子ども劇場所属の4人の小学生を主要キャストに迎えての収録。配役を巡ってややが、培ってきたチームワークと対話力で乗り越え、思い切った演技で収録を終了。編集作業は地元FM局のラヂオつくばにも協力してもらい、7分間のドラマを完成させた。制作期間4ヶ月におよぶ力作だっただけに、優秀賞受賞に参加者の喜びもひとしお。主要キャストの一人、浜渦なごみさんは「小学校生活最後の年にいい記念になりました。またやってみたい」と語った。

収録では小学生からシニアまでが１つのマイクを囲んだ

新設「市民大学」開校の参考に
長崎県大村市職員が視察来校

13年5月30日、長崎県大村市・総務部男女いきいき推進課市民協働グループの2名が、同年秋の「おおむら市民大学」の開校に向けた視察でつくば市民大学を訪れた。

この日の視察は、市民大学の「対話や体験を通じた参加者同士の相互作用を大切にする」コンセプトに大村市が注目し、実施されたもの。同課の浦上優香さんは、「市民大学で検索すると、かなり上位にヒットするのがつくば市民大学でした。講座内容や理念も興味深く、おおむら市民大学開校に向けて、なにかヒントがあれば、と視察をお願いしました」と語り、市民大学の活動内容がひろく浸透してきていることをうかがわせた。

当日は、単なる「視察・見学」にとどまらず、より深い「対話」の場にしようと、三つ折にすると席札となる自己紹介シートを作成したり、冒頭で「終了時に期待する状態」を設定し、それをもとに全員で時間の使い方を考えてタイムテーブルをホワイトボードに記してから対話するなどのスタイルをとり、活発な意見が飛び交う密度の濃い時間となった。

16機関のネットワーク構築
特性を活かした就労支援実現

既存の福祉制度の狭間を埋める―。ウニベルシタスつくばが取り組んだ「発達障害のある若年層への就労支援モデル事業」は、公的・民間の支援機関、親の会、企業など計16機関によるネットワークを構築し、モデル期間終了後の現在でも取り組みが継続している。〈本文記事1面〉

この事業は、11年11月3日の公開講座が起点となったもの。発達障害の力を活かすソーシャルビジネスを確立した鈴木慶太さん（株式会社カイエン代表取締役）の講演を聞いた参加者から「つくばでも同様の取り組みが実現できないか」との声が上がり、同社に県・市の障害福祉課、NPO法人艫づな会を加えた5団体で協議会を構成、「新しい公共」モデル事業へと手を挙げて採択された。

当事者への訓練事業、受け入れ側の企業に対する啓発事業とともに、協議会が力を入れたのは支援機関同士の円卓会議である。コーディネーターを務めた西谷明子さんは「計5回の開催で新しいつながりができるとともに、既存のつながりも強化され、知見の共有のみならず、長期的な支援体制の礎を築くことができました」と語る。

モデル事業終了後、連携体制は「つくば発達障害キャリア支援ネットワーク」へと再編され、現在も取り組みが続いている。

もったいないをありがとうに
茨城初のフードバンク誕生

11年3月、茨城で初めてフードバンクが設立。つくば市民大学で開催された講座受講者の有志が準備会を発足させ、NPO法人設立まで漕ぎ着けた。安心して食べられるのに捨てられる食品を集め、食に困る福祉施設等に配布する活動が、さらなる広がりを見せている。

「フードバンク講座」は、10年1月から連続4回開催された。中心となったのは、NPOや企業、生協、労働組合、メディアで構成される「SRネット茨城」。組織連携による社会貢献の実践としてフードバンクに着目し、講座開催に至った。その後、受講生主体の準備会が発足し、法人設立となった。

児童養護施設「筑波愛児園」へも食品が寄贈された

フードバンクとは、賞味期限内で安全に食べられるが、規格外や包装ミス等のため廃棄される食品（食品ロス）を、福祉施設等に無償配布する活動を指す。テレビでの紹介から、全国的な市民活動として展開された。農林水産省試算では、食品ロスは国内で毎年900万トンにも上る。企業等は経費をかけて食品廃棄しており、寄贈によって生まれる経済的・社会的効果は少なくない。企業等が本業を通じて社会貢献できるフードバンクに、環境と福祉の両面から注目が集まる。つくば市内の児童養護施設の施設長は、「食べ盛りの子どもには、フードバンクからの食品でおなかだけではなく心も満たされる」と語る。

東日本大震災では、市民大学と連携し、全国から集まる寄贈食品等を被災地に届けた。4年目を迎えた今年、市民大学でフードバンクと社会福祉協議会等との地域連携推進会議が定期開催され、生活困窮家庭への食品提供を拡げる。一般家庭からも「フードドライブ」という行事を通じて、生協店舗などで食品を不定期に集めている。

寄付で支えあう社会へ
いばらき未来基金発足

12年10月、つくば市民大学での講座を契機に「いばらき未来基金」が発足。地域課題解決のための寄付の拡充を目指す取り組みに、視線が注がれている。

市民大学では「寄付社会とNPO」、「ファンドレイジング実践講座」、「認定NPO法人取得支援講座」等、寄付関連講座を多く開催。東日本大震災では支援手段として寄付が着目されたが、発災時に市民大学で開催されていたのが「寄付社会とNPO」講座だった。

これら講座を発端に、12年10月「いばらき未来基金」が発足。寄付の使途透明化を図る寄付メニューが並び、気軽に寄付できる仕組みと注目が集まる。市民大学でも気軽に寄付ができる「いばらき未来の木」や募金箱の設置、寄付つきTシャツの販売など取り組みが広がる。

税金によらない市民活動を支えるには、寄付は重要な役割を果たす。茨城NPOセンター・コモンズによると、NPOの寄付収入比率は5％程度。常務理事の横田能洋さんは「寄付でNPOを応援すると地域社会が変わる。未来基金に参加を」と呼びかける。

環境を考えた融資
地域経済を活性化

09年5月23日、公開講座「あなたのお金が世界を変える！？」が開催された。この講座は、NGOアー・シード・ジャパンが取り組む「エコ貯金」と、おひさまエネルギーファンド株式会社の「おひさまファンド」の事例を通じて、納得のいくお金の流れを考えようというもの。

環境や人に優しく地域社会のためになるお金の流れをつくる銀行へ貯金する「エコ貯金」や、太陽光、風力、森林資源など地域のエネルギーを活用した「おひさまファンド」の活用など、一人ひとりがお金の流れる先をしっかり意識することで、地域に自然エネルギーが増え、地域経済の活性化に役立ち、未来の子どもたちにも本当の意味での豊かな暮らしを受け継ぐことができそうだ。

持続可能な社会へ
自らを変化に
ガンジーに学ぶリーダーシップ

14年1月28日、連続講座「ビー・ザ・チェンジ～ガンジーに学ぶリーダーシップの旅～」が開講した。半年間、全8回の予定。

この講座は、ガンジーの「もし君が世界に変化を望むなら、君自身が変化そのものになれ」という言葉を導きの糸に「持続可能な社会のために、自らがどのような変化になるのか、一人ひとりが持論を見出し、選択し、行動する」ためのもの。『ガンジー自伝』と野田智義・金井壽宏(著)『リーダーシップの旅』をテキストにしつつ、各自の体験をベースとした参加者同士の対話で進行する。

15名の参加者は毎回、講座と現場、現場と講座をつなぐ「ブリッジシート」を書き、共有する。対話の内容も持ち回りでテープ起こしをしており、小冊子にまとめることを計画している。参加者の一人は「課題図書や宿題があるハードな講座ですが、仲間に触発されて、日々の暮らしに少しずつ変化が生まれてきました。これからが楽しみです」と語る。

討議型意識調査・「新しい公共」…

10年2月25日、公開講座「日本初・討議型意識調査（DP）の衝撃」が開催された。DPとは、米国の政治学者フィシュキンが提唱する、アンケートの前後に「公正な情報提供」と「市民相互の討議」を挟むことで、世論調査の質を高めようという社会実験。日本では09年に神奈川県で初めて実施された。

講座では、その理念・手法の紹介や、討議でのモデレーターの役割に関する意見交換などがなされた。

10年8月から11月にかけては、「あたらしい『新しい公共』フォーラム」が全4回開催された。「すべての人に居場所と出番がある、支え合いと活気のある社会をつくるための当事者たちの『協働の場』」であるとされる「新しい公共」という概念への理解を深めようというもので、昼の部はコーヒーを片手に、夜の部ではノンアルコールビールを飲みながらというリラックスしたスタイルで語らいが続いた。

次代のデモクラシーの形学ぶ

「解決できない借金問題はない」
宇都宮健児さん講演会開催

お金を借りる情報だけがあふれている今の世の中。ワーキングプア、格差社会、社会的貧困といった問題と真正面から向き合う弁護士、宇都宮健児さんの講演会が、つくば市民大学のオープニング特別講座として09年3月15日に開かれた。

「解決できない借金問題はない」と題された講演会の参加者は28名、熱心に聞き入る方々が多く、実際の人数以上に熱気にあふれていた。

最前線の現場から届けられたリアルな講演内容は、あたたかな口調ながら迫力に満ちており、参加者からは「『公的制度の不備を突く形で、ヤミ金や紹介屋・整理屋、提携弁護士・司法書士といった悪が跋扈している。低金利の公的融資の充実、生活保護制度の運用改善などを通じたセーフティネットの強化、貧困問題の解決といった、根本からの対策が必要だ』という主張には、深く頷かされました」との感想も聞かれた。

多重債務問題を入り口に「暮らしやすい社会のあり方」を考えたこの講座は、地域や社会の課題を解決する場として生まれた市民大学らしさを方向づけるものとなった。

海を越えた「まなぶ・つながる・つくりだす」
台湾・雲林県から視察団来校

12年11月7日、台湾・雲林県からの視察団がつくば市民大学を訪れた。市民大学の基本コンセプト「まなぶ・つながる・つくりだす」が海を超え、新たな「つながり」が生まれた一日となった。

この日市民大学を訪れたのは、台湾・雲林県の社区大学の関係者総勢15名。社区とは「地域」「コミュニティ」を意味し、社区大学とは、台湾における生涯学習制度の中心。98年に台北に初めて設立されたのを皮切りに、今では離島なども含め台湾中に100校近く開設されている。

市民大学を視察先に選んだのは、インターネットで取り組みを知ったという、筑波大に留学経験がある社区大学の黄世輝さん。「充実した講座内容と先進的な取り組みを視察し、雲林県での今後運営に活かしていきたい」とメールで視察依頼を寄せたのがきっかけとなった。

当日は、歓迎と友好の気持ちを表すため、翻訳ソフトの力を借りて、資料の一部を繁体字中国語で作成。にわか作りのたどたどしい中国語表記による資料を見た視察団からは、時折笑い声があがったが「内容はだいたい理解できました」とのこと。市民大学なりの「おもてなし」は、しっかり伝わったようだ。

スライドを用いた「誕生までの経緯」「事業内容」「運営方法」「基本理念」の通訳を交えての説明に、参加者は熱心に聞き入っていた。その後、机を円形に組み、全員が発言しやすい形での意見交換会。対話を重視する「市民大学らしさ」をアピールした。

地元カフェの茶菓を囲んでの懇親会のあと、雲林県社区大学の横断幕を持って全員で記念撮影。「つくばと雲林県でぜひ一緒に何かやりましょう！」固い握手を交わし、終了予定時間を大幅にオーバーする盛り上がりを見せた。

市民の変革力強化を＝アメリカのNPOに学ぶ

NPO法施行10年を経た09年6月1日、岡部一明さん（愛知東邦大学教授）を講師に迎え、「アメリカの市民パワーの秘密」が開催された。

テーマは「NPOの運動性とは何か」。日本にアメリカの市民運動を紹介した一人である岡部さんは、アメリカのNPO発展の背景にあるアメリカ社会と日本社会との違いについて、サンフランシスコのタイズ財団の取り組みの事例などを交えて紹介した。

議員が無報酬であること、NPOのような自治体の運営のあり方など、市民自治の多様な形とあるべき姿をあらためて問い直す講座となった。

定住外国人との共生
先進事例から学ぶ

10年2月から3月にかけて、4回シリーズで「多文化共生講座」が開催された。

リーマンショックで多くの日系ブラジル人が仕事を失い、県内でも子どもたちの教育問題が表面化する中で開催されたこの講座では、ダイバーシティ研究所の田村太郎さんから、「交流」の段階から「共に暮らす」段階に変わっていく中で求められる市民の役割を学んだほか、愛知県で行われている「外国とつながる若者のキャリア教育」や、新たな日本語学習の仕組みを学んだ。

日本語学習について考える回には、県内に暮らすブラジル人も多数参加し、実際に日本語を楽しく話す練習も行った。

神戸に学ぶ多文化共生 多言語での情報発信を

「多文化共生講座」での学習の実践として、茨城NPOセンター・コモンズは10年6月、県国際課との協働で「外国人就労就学サポートセンター」を常総市に開設した。

同年7月14日には、南米系の人もスタッフとして運営するセンターとつくば市民大学のコラボレーション講座として、神戸のNPO多言語センターFACILの吉富志津代さんを迎え、「多文化共生時代の市民と行政の役割」を開催。阪神・淡路大震災後に始まった母国語でのラジオ番組制作、外国人自助組織の立ち上げ、行政との連携など、多くの事例が紹介された。

同講座終了後には、コミュニティFM「ラヂオつくば」でのポルトガル語の情報番組も誕生した。

海外に住んで分かる普通の人々の暮らし

講座「市民の眼からみた海外の国ぐに」が、13年2月24日から定期的に開催されている。これまでに紹介された国は、アフガニスタン、アルゼンチン、オーストラリアなど。他国で仕事に従事しながら長く暮らした方の眼から見た、海外旅行では分からない「普通の人々の暮らし」が伺える。その国の歴史や文化、また国籍は違えども同じ人間ならではの心温まるエピソードなど興味はつきない。

ベトナムの回では、映画や舞台にもなっているベトナム戦争がテーマとなった。大陸続きだからこそ起こる争いの悲劇にもかかわらず、笑顔で強く生きる人々の話に参加者は感動を受けていた。

論考

対話を重視し、地域課題の解決へ

ウニベルシタスつくば代表幹事　徳田太郎

まなぶ・つながる・つくりだす。私たちつくば市民大学の基本コンセプトだ。これは「世代や立場、組織の枠をこえて学び、交流するなかから、地域や社会の課題を解決するために私たち自身ができることを探っていく場にしていこう」という宣言でもある。

課題解決を意識した実践的な学びの場は、座学だけでは絶対につくり得ない。「何を学ぶか」ではなく「どう学ぶか」が決定的に重要となるのだ。そこでいく「ファシリテーター」であることが求められるのだ。

これは、単なる方法論だけの問題ではなで互いに教育しあうのだ」と述べ、伝達による教育から対話による教育への転換を訴えた。一方通行の関係が、集うすべての人の相互のかかわり方にも反映されている。「～してあげる」や「～させる」という意識、サービス

私たちは、講座企画者に「先生にならないで」とお願いしている。ここでは、参加者とともに考え、知恵を育んでい。ブラジルの教育学者、パウロ・フレイレは「いまや、誰かが誰かを教育するのではない。人々は交わりの中の提供者とお客さんという意識ではなく、ともに学び、成長し、地域をつくっていく、対等なパートナーとして

私たちから主体性や自律性を奪うからに他ならない。

このような考え方は、つくば市民大学にかかわりあうこと。ここでは常に〈ために〉ではなく〈ともに〉というあり方が問われている。

つくば市民大学は、市が設置・運営する「つくば」市民大学でも、域内の住民のみを対象とする「つくば市民」大学でもない。つくば「市民」大学、市民性（シチズンシップ）を磨くための場なのだ。

社会を創る市民の学び舎

常磐大学教授　池田幸也さん

「わたしたちの社会をわたしたちが創る！」つくば市民大学は、この実現をめざして5年の実績を重ねてきた。たとえば、フードバンク講座からはNPO法人フードバンク茨城が設立され、東日本大震災の際には、緊急支援物資の集積拠点の設置・運営を担った。社会のメンバー（＝市民）としての実感を育み、行動を起こし、課題に取り組む。これらすべてが市民大学の学びとなる。

現代社会は多数の人と出会う社会である一方、孤立を招きやすい。孤独死の事例をあげるまでもなく、家庭・地域・職場・学校などで孤立や孤独に直面する人は少なくない。この背景には、様々な場面での関係性の希薄化がある。分節化・分業化する社会、人との関係は、部分的なものとなりがちである。そこで、ある人はアイドルグループのファンクラブに加入し、またある人は、習い事や趣味の仲間とひと時を過ごす。これも、孤立や孤独の不安から逃れるための対処法なのかもしれない。

しかしこうした営みで埋まらない希薄化の溝がある。それが、日常生活の場である地域のつながりにある。防災はもちろん、孤立を防ぐためには、「わたしたち」という新たな地域のつながりの認識を培う営みが必要だ。

つくば市民大学は、「わたしたち」がめざす社会をデザインし、担い手である市民を相互に育み、「わたしたちの社会」を創りだす期待の学び舎だ。

社会貢献の循環づくりを

中央労働金庫　総合企画部　岩村真奈美さん

企業と市民活動団体の協働には、様々な制約があるのも事実であるが、お互いの立場や役割を明確にし、地域の課題解決にむけ、企業だけでも、市民活動団体だけでもできない、協働するからこそできることをこれからも模索し、いかに継続させるかが課題である。

〈ろうきん〉は、97年に共生社会の実現を目的とした理念を策定し、働く人の団体はもとより、広く市民活動とのネットワークを大切にしてきた。

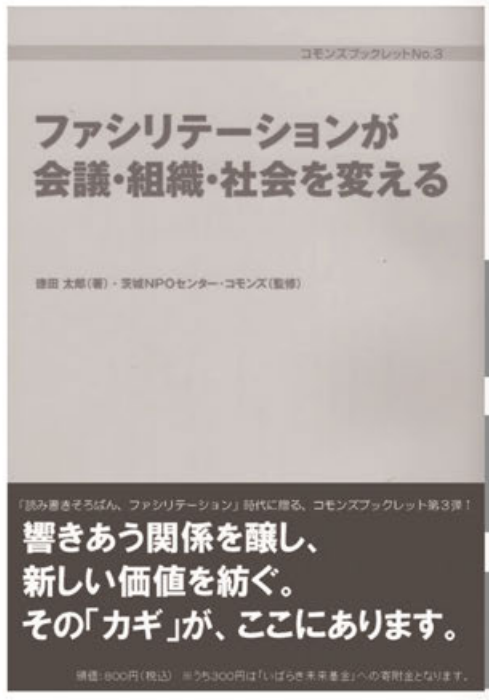
そのような中で中央ろうきんは、多くの方が市民活動に触れる機会をつくることを目的に、09年にウニベルシタスつくばとともに「つくば市民大学」を開校した。

多くの働く人たちが地域における課題に目を向け、自分たちに何ができるのかを考えることによって地域貢献につながれば良いと考えている。

一般に、企業の社会貢献活動は、外部から評価されてこそ実施主体の動機付けになると言われており、このためには、活動の充実はもとより、「取り組みを知らせる活動＝発信力」が求められる。

外部からの評価が企業価値を高め、職員の働きがいにつながる、この結果、さらに企業価値が高まり、新たな社会貢献活動へとつながっていく。

中央ろうきんはこの循環をつくり、市民活動団体や地域との関係を強化し、ともに発展していくことをめざしていきたい。



ファシリテーションが
会議・組織・社会を変える

ウニベルシタスつくば代表幹事　徳田太郎 著　茨城NPOセンター・コモンズ 監修

2008年出版の『ＮＰＯの会議、こうすればうまくいく』、
2010年出版の『「かかわり」のファシリテーション』の2冊を　合本！増補！

前作・前々作は増補分も完売！
今作も含めおかげさまでシリーズ累計　4000部突破！

ＮＰＯや企業、
全ての『会議』に迷える旅人たちのための　ガイドブック！

お求めは、つくば市民大学窓口、または、
茨城ＮＰＯセンター・コモンズ（email:info@npocommons.org）まで。

800円（税込）
※うち300円は「いばらき未来基金」への寄付金となります。

つくば市民大学 創設に携わった人々の思い

つくば市民大学の創設に携わった多くの人々の中から、ウニベルシタスつくばの2人、中央ろうきんの2人に当時の思いを聞いた（肩書は当時）。

ひと

つくば市民大学インターン 中田 秀一 さん

大学入学以来、つくばに住んで現在に至るという中田さん。「就職活動がうまくいかず、仕方なくつくばの近辺で働いていました。最終的に市内のレンタルビデオ店で働いていたんですが―」

個人店だったそのお店が、13年に大企業に吸収された。経営者が変わることで、仕事の質が「自分たちで課題を見つけ解決していく」から「上から落ちてきたモノを効率よくこなす」に変わってしまい、違和感があったという。

「このままだとつまらない、と思いました。そんな時、たまたまネットで見つけたのがつくば市民大学のインターンシップの記事でした」

活動を始めて、生活の変化を感じているという中田さん。「仕事で覚えた技術が喜んでもらえたり、ちょっとしたアイデアを具体化できたりする場所があるのは楽しいものですね」

インターンシップのゴールは、自分自身で講座を企画し、実施するまでの一連のプロセスを担うこと。「以前の私と同じように、仕事が忙しかったり、他の人とつながる場所がどこにあるのかわからなくて、休みになるとぽつんと一人になっちゃう人は、たくさんいると思うんですよね。そういう方こそ、一度何かの講座に参加してみてほしいな、と思います」

インターンプログラム 市民活動の基礎習得

つくば市民大学では13年度、近郊在住者や社会起業・市民活動などに関心のある方を対象に、インターンシップの受け入れを開始、10月よりまず1名が活動を開始した。

プログラムでは、実践やレクチャーを通じて、プロデュース、コーディネーション、プロモーション、ファシリテーション、マネジメントの5つの領域でのポイントを獲得しながらソーシャルな活動の基礎を学んでいく。

1期生となる中田秀一さんは初日の10月7日、「対話ファシリテーター育成講座」や「映画トークカフェ」に参加し、その内容をブログで発信する形でスタートを切った。

これに先だって行われた説明会では、企業を退職した方や学生など、様々な人が参加。中田さんは参加の動機を「職場の急な環境の変化を体験して、仕事だけではない生き方、社会との関わり方の必要性を痛感し参加しました。せっかくの機会ですので、インターンを通じて色々な人と出会えればと思います。関心を持った方はぜひご応募を」と語る。

茨城NPOセンター・コモンズ常務理事

横田 能洋 さん

中央ろうきん助成プログラムの選考委員をしていた関係で知り合った山口さんから、空きフロア有効活用の相談を受けた。深夜のファミレスで徳田さんと話をしている中でつくば市民大学の構想が生まれたが、そこからが長かった。ろうきん内部の意見を調整してくださった山口さんのご苦労がしのばれる。

ろうきんには強い社会貢献マインドがあり、我々もビジョンを明確に持っていたからこそ、周囲の理解が得られたのだと思う。

駐車場がないことや、古くて狭いトイレなど、ハード的に問題もあったが、知恵と力を集めて一つひとつ解決していった。現在は立派なバリアフリートイレができて市民大学の売りになっている。

00年頃に参加したワークショップで、NPOの大学、銀行、ファンド、メディアをつくるという夢を描いた。大学の夢が現実になった今、消費に慣れきってしまっている世の中で何かをつくりだす場、「市民知」が発信できる場としてさらに成長してほしいと思っている。（談）

つくばアーバンガーデニング事務局長

井口 百合香 さん

横田さん・徳田さんから構想を聞き、ぜひやってみたいと参加した。画期的だったのは、ろうきんとウニベルシタスつくばの関係がフラットだったこと。ハード・ソフト両面とも、こちらの意見を十分に聞き、ほぼ全面的に反映させてくれたことで、「わたしたちの場」という思いが生まれた。資金調達に神経を使わなくてよかったのも、とてもありがたかった。資金力と企画力、ふたつの強みがコラボできたからこそ生まれた場所だと思う。

構想段階で生まれた「ウニベルシタス」という言葉は、中世のヨーロッパで学生たちが自主的に集まり、街角のカフェで教師と学生が一緒に議論した「大学」の語源だという。ともにつくり上げるまなびの場でありたい、という徳田さんの想いがこもったいい言葉だし、その想いが実現されつつあると思う。

つくば市民大学の特色は、利便性やわかりやすさだけを求めるのではなく、市民が自ら考え、まなび、発信できるところにある。今後もこの路線で進んでもらいたい。（談）

中央労働金庫総合企画部CSR企画次長

山口 郁子 さん

07年の春頃、「つくばビル5階スペースに、ろうきんらしいテナント候補を探している」との話が出た。折しもNPOとの協働の機運が高まっている時。「ろうきんの資源とNPOのノウハウやネットワークで地域参加と貢献を」と提案した。その後、先輩や上司のご尽力によって、つくば市民大学が誕生した。

発足までの道のりは平坦ではなかったが、09年の開校以来、今も地域の皆さんに活用されているのは、関わるすべての人の協力や理解、そして、難しい課題にぶつかっても挫けることなく解決策を一緒に考え、企画・運営を共に進めてきた運営委員の皆さんとの信頼があったからこそと感じている。今後も、世代や立場、組織の枠を超えて学び、交流するなかから、地域や社会の課題を解決するために、自分たちにできることを探っていく場であり続けてほしいと願っている。（談）

中央労働金庫総合企画部CSR企画次席調査役

梅村 敏幸 さん

開校直後に山口さんと交代で次長になり、12年に異動になるまでの3年間、運営に携わった。事業体と市民団体の協働による場づくりという画期的な取り組みには前例もなく、不安があったが、初年度から緻密なプログラムが提案され、何とかいけそうだと思った。

設立までの過程では、ハード・ソフト両面で何度も変更を余儀なくされたが、メンバーの皆さんが辛抱強く対応してくれたことにずっと頭が下がる思いだった。開校直前に徳田さん夫妻と一日中什器の組み立てをしたことは楽しい思い出だ。

11年の震災直後、地域の人々からの被災地への支援物資で埋め尽くされた。支援の気持ちを受け止める場になり、運営に携わっていて本当によかったと思った。

つくば市民大学のような取り組みが全国各地に広がれば、安心して暮らせる社会づくりに貢献できるのではないかと思う。（談）

「自立」が社会を育む

つくば市　松浦　幹司

アダプト・ア・ロード松代の一員として、毎朝ウォーキングのついでにゴミ拾いをすることが習慣になっている。ポイ捨ては「やってはいけないこと」だと誰もが思うだろう。

「やってはいけないこと」をしない人達が増えるよう、仲間を集め、共に考え行動することで「やってはいけないこと」が少なくなる。さらにその先には「新しい価値の創造」があり、そうやってより良い社会になっていく。それは、市民大学の「暮らしやすい社会を自分達でつくる」という理念に繋がるのではなかろうか。私たちの祖先は過酷な自然と闘い、時には人間同士の戦を経ながらも生き延びてきた。反省しては規範をつくり、必要に駆られ新しい価値を生む、その英知があってこそだ。身近なところでも多くの団体がより良い社会を目指し活動している。担い手である市民は自ら考え、話し合い、行動できる自立した人達であってほしいと願っている。

「市民力」を育てる場

桜川市　君島真理子

市民大学の存在を、筑波山の北側、桜川市から眺めていました。いわゆるカルチャーセンターとして、つくばならではの文化レベルの高い講座が開かれているのだろうと。確かにレベルが高いプログラムがずらり、ですが実際に参加してみると、一方的に聴く形式の教養講座とは違っていました。自分や地域の課題を学び合い、解き深めていく。さまざまな価値観や思いをもつ人と交流し、つながることで、自分の中にある「何か」が見出され、紡ぎだされていく。市民大学は、受動ではなく、参加者が常に主体的に関わり、いっしょに考える、まさしく市民力を育てる場なのでした。年齢や立場を超え、考え方や感じ方も異なる人が出会うことで、何かが生まれ、何かが始まる。ドラえもんのポケット的に、いつでも、どこでも学びのドアが開かれ、ときには駆け込み寺ならぬ駆け込みカフェにもなる。多くの方に参加をお勧めします。

ボヤキの一言が発端で

つくば市　山田　実

ある日のこと。市民大学の集まりに加わったことから、「そうだ。市民大学でいろいろな国の人びとの当り前の生活を知り合えば、政治や経済を通さないその国の様子を知る機会にならないか。それにここつくばには、国外生活の経験者が多いはず」と提案したところ、「市民の眼から見た海外の国ぐに」が、サロン・ド・BOYAKIのひとつとして始まった。これまでにアフガニスタンなど5回開かれた。話題提供者が千差万別であれば、参加される人びともまた老若男女さまざまである。話題もまた、生命の保証がおぼつかない国もあれば、陽光燦々の熱帯の国、その国の文化の匂い芬々かと思うと、おおらかな大地の景観と多様だった。参加された人びとの感想はおおむね好評で、「これこれの国の話も」とけっこう注文も多い。そしてこの集まりから、偏狭なナショナリズムを超えた意識が共有できればと願っている。

遊びは学びにつながる

つくば市　向田　道子

皆さん、子どもの頃好きだった遊びは何ですか？　私は読書と人形遊びです。読書の楽しみは継続しており、市民大学でも「ブックトーク・カフェ」に参加しています。人形遊びの方は、大人になり、実際に人形を手にして話を考え場面を設定しキャラクターを考え会話するという、頭と体と心を使っての遊びからはだいぶご無沙汰していました。しかし、市民大学でサティシュ・クマールの映画上映会に参加して映画を観た後、グループに分かれて意見交換をした時に、久々に頭と体と心を使って遊ぶ自分に返りました。サティシュの言葉から、また参加者の皆さんの言葉から教えられることも多く、遊びは学びにつながっていると実感しました。市民大学は私にとって学びのきっかけをくれる場であり、人との出会いの場です。ますますの発展を心から願っています。

孫への負の遺産残すな

守谷市　石川　秀夫

「ともに学び考えよう持続可能なエネルギーの未来」に参加してから価値観が大きく変わった。原発を建設したが国民投票で一度も稼働しなかったオーストリア、風力発電などで電力を180％自給している岩手県葛巻町、地熱発電などの自然エネルギーの開発等々を例に、参加者が立場や価値観の違いを越えて話し合った。それをきっかけに、林業や震災で失われた海岸林をよみがえらせる取り組みを考えるシンポジウムや、利根川のオオタカや鬼怒川の外来植物など動植物の生態や植生を学ぶワークショップにも参加した。その結果そこで得たものは、自然を後世に残すことが我々先人の義務であり、自然に帰すことのできない原発という負の財産を孫の世代に残してはならないという結論だった。せめて元気なうちに「原発ゼロ」という負からの転換の道筋だけは決めてほしいと願っているのは、私だけではないだろう。

体と頭を共に動かして

つくば市　赤松　洋子

つくば子ども劇場で市民活動に携わり、市民大学オープン前からコモンズの横田さんにうかがっていたので期待していました。組織の運営を任されていたものの、経験もなく、市民大学の講座に参加する中で、ノウハウに加え、他団体にも共通する悩みがあることを知り、励まされました。11年3月1日に参加した「『希望』をめぐるダイアローグ・カフェ」は、会の創立20周年事業目前でした。その事業はつくば市とも共催で、市民大学等での学びを結集して実現するはずでしたが、中止に。急にやることがなくなって消沈していたら、支援物資の収集が始まったので、毎日来て、体を動かして過ごしました。その1年後、ウニベルシタスつくばの幹事として運営に参加、頭も動かすことになります。これからは表現講座を企画し、子ども、大人、いろんな方と演劇のような活動ができたらいいなと思って、今考えているところです。

初めて味わう学ぶ喜び

龍ケ崎市　山崎　倫明

昨年、「はじめよう！伴走！」講座に参加した。私自身は十数年の伴走経験があるので、教える側の立場のつもりで参加した。ところが、円形に配置された席で皆さんの反応を感じながら話していると漠然と考えていたことが徐々に深まり、改めて伴走を理解できた。質問に答えながら「ああそういうことだったのか」と閃くこともしばしばあった。本講座で初めて伴走に触れた人も多くのことを学んでくれたと思うが、私はそれ以上のことを学ぶことができたと思っている。市民大学には教える人はいない。縁あって教室に集まった人の語らいが講座を創り上げ、それぞれの経験や感性が内容を深め、発展させ、その中から自分なりに学び取る。まさに筋書きのないドラマのようで、ワクワクの連続だった。学生時代、これほど学ぶ喜びを味わった記憶はない。「まなぶ・つながる・つくりだす」、これこそ理想の学びの姿であると実感した。

【解説】つくば市民大学の講座をつくるまで

つくば市民大学学長のマッツじゃ。講座をつくるまでの流れを簡単に解説しよう。

まずは、つくば市民大学の主催講座を体感しよう。対話を重視した、気軽に参加できるワークショップ形式のものが多いぞ。入学するための資格はないし、卒業するための単位もない。必要なのは「暮らしやすい社会を自分たちでつくっていこう」という思いだけじゃ。講座に参加して、世代や立場、組織の枠をこえたフラットな雰囲気を満喫してくだされ。

出会った仲間と学び交流する中で、日頃から感じている悩みや、地域や社会の課題を解決するための講座の構想が生まれてくる。同時に、それを応援してくれる人も生まれてくるはずじゃ。そんなつながりが得られる場がつくば市民大学なのじゃ。

取り組みたいテーマは、サステナビリティ、ダイバーシティ、コミュニティ、ライフスタイルのうち、どの学科に当てはまるじゃろう？　開催への想いや、講座の内容が、つくば市民大学のコンセプトやミッションにあっているかどうかも確認してみよう。また、多様な人々に開かれた講座であること、つまり、自分や自分たちがしたいことだけでなく、社会から求められていることであるかを意識してつくろう。もちろん、参加・体験・相互作用を重視した進め方を考えることも大切じゃ。詳しくは「つくば市民大学へのおさそい」をご覧あれ。

自分が企画した講座の中で参加者と共に考え、参加者と共に知恵を育んでいく。「まなぶ・つながる・つくりだす」の循環が始まるとさらに仲間が増えていく。これぞつくば市民大学ならではの醍醐味じゃ！

本と人、人と人をつなぐ
ブックトーク・カフェ

「あら、お久しぶり。どうしてた？」「おすすめの本、読んでみたよ。面白かったなあ」

こんな会話から始まるブックトーク・カフェ。11年9月からスタートし、つくば市民大学でも最も長く続く講座の一つである。ゆるやかで自由度が高いのが人気の秘訣だ。

ブックトーク・カフェは、おすすめの本を読む・語りあうことを通じ、人と人、人と本、人と社会がつながる「たまり場」。前身の「カフェテラス・デー」から数えると、開催は40回を超える。

お茶とお菓子を囲みながら、本のことや世の中のこと、自分のことなどを気軽に語りあう。世代も職業も好きな読書のジャンルも多様な参加者が持ち寄る本・話題はバラエティに富む。

参加者は「ここへ来ると、知らない世界がまだこんなにあるんだなあと刺激になります」「毎月楽しみにしています。最近は読書をする習慣から離れているけれど、ここでみなさんとおしゃべりするだけでも十分」と語る。

時には参加者手作りのお茶菓子が振る舞われ、「村上春樹を読む」がテーマになったり、一つの作品の評価を巡って熱い議論が飛び交うことも。13年の秋には初の試みとして近所の公園で実施、ピクニック気分でブックトークを楽しんだ。毎月第一日曜日に開催中。

ミニエッセイ
5年後の〇〇

5年後の社会

つくば市　北村まさみ

地域の中にはいつも多様な人がいて、共に生きるための知恵を地域のみんなが知っていて、年令や能力や環境の違いをみながら受け止められる柔軟な社会。誰かや何かが犠牲にならないエネルギーと、誰かがハッピーになりながら作り出したモノを使い、自分を尊重するのと同じくらい他の生き物も同じように尊重され、「何かあってもまた立ち直れる力」を備えた社会。そこに一歩でも近づけるよう、取り組むつくば市民大学、私でありたい。

5年後の茨城

守谷市　大野　覚

このようなテーマになると、つい「茨城には明るい未来が」となりがちだが、5年後は案外早い。東日本大震災だって、3年前にもなるのだ。5年後に過度な期待を持つより、むしろ地域にあるいろいろな課題に、地味でも良いので着実に、一歩一歩取り組むことが必要なのではないか。「いばらき未来基金」は5年後、地に根を張った、地域を支える取り組みにしっかりと水（助成）を注ぐ、そんな存在になるよう、市民と一緒に育てていきたい。

5年後の土浦

土浦市　小林まゆみ

駅前の市庁舎や図書館はいつも市民や学生で賑わい、亀城公園周辺は古民家を再生したお店が点在するエリアとして親しまれている。霞ヶ浦には世界一の規模の噴水が七色に輝き、多くの観光客で賑わっている。駅からマリーナへの散歩道にはオープンカフェやレストラン、ポニー牧場やドッグランも完成し、夏は湖上花火、冬は湖畔のイルミネーションが市民の憩いの場所となっている。そんな5年後の土浦を満喫している私は今と変わらず若い…はず。

5年後のぼく

つくば市　高橋　有男

ぼくは、5年後も無事に生き延びているだろうか。戦争や原発事故の災禍を免れたとしても、その火種が消滅することはあり得ない。万能細胞のような画期的治療法が開発されて、脳性マヒを克服する可能性も限りなく低い。もしかしたら、続けて急逝した学友たちを追うように、黄泉の世界へ旅立っているかもしれない。あるいは、年老いた家族や愛犬の元で、相変わらずダラダラと過ごしているかもしれない。いとしい人の笑顔を思い浮かべながら。

5年後の光景

つくば市　柚山　義人

澄んだ広い空、清らかな水、緑の大地、行き交う人の微笑み。ここ自然エネルギータウンでは、技術革新により機能・効率を徹底的に追及した世界と、心の豊かさを培う世界が共存している。午後3時までは目いっぱい仕事、その後は趣味と社会貢献に精を出す健康的な暮らし。5年前から、平和維持やリスク管理に浪費していた社会コスト、エネルギー、マンパワーが、新しい価値観、環境スタイルによって、自立力がある社会づくりに向けられた成果だ。

ウニベルライブラリー開設
みんなの情報交差点として

つくば市民大学の本棚は、NPOやボランティア、コミュニティデザインやワークショップなどに関連する書籍が充実。ラヂオつくば「ウニベルラジオ」の人気コーナー「今週の一冊」で紹介された本も揃っている。ここは「ウニベルライブラリー」として開放され、会員は自由に閲覧できる。市内外の様々なイベント・団体の案内チラシを設置する「みんなの情報コーナー」も併設している。

館内は無線LAN完備。端末やパソコンの持ち込みもでき、サーバーで淹れたおいしいコーヒーも飲める（寄付金100円）。活動に役立つ参考文献を探したい、空き時間にネットを使いたい、地域の情報収集がしたい、そんな時に気軽に利用できる情報交差点だ。

古本5万冊を寄贈
障害者の職業創出

古本寄贈の社会貢献活動「リ・ブック」。その活動方法は、読み終えた古本を中央ろうきんに送付するだけといたって簡単だ。10年6月から取り組みを開始し、これまでに中央ろうきんに集まった5万冊以上の古本が、障害者を支援する福祉施設へ寄贈された。

福祉施設では、古本をインターネットで販売し、売上を利用者の工賃として還元する。販売過程において、古本の洗浄、販売サイトへの登録、購入者への発送などの仕事があり、障害の有無や程度にかかわらず、能力に応じて仕事を分担できることが、社会参加に困難を抱える多くの利用者に「就労の場」を創出している。

つくば市民大学でも、学園祭の「大古本交換市」で最終的に残った書籍などを中心に、継続的に寄贈を行っており、随時受け入れを行っている。

これまでに開催された講座の一覧を16面に掲載

「ともに」つくる喜び体験
いけばなで多様性表現

10年7月、華やかないけばな作品の数々がろうきんつくば支店のロビーを飾った。連続講座「多様性に気づく・多様性を築く～いけばなを通して～」の参加者たちが制作したものだ。全6回の講座を通して「自然との対話」「かかわりあい」「いけばなの美」を体験した。

最終回には高さ２ｍを超える大作のいけばなを完成した

この講座は、趣味でいけばなを続けている会員から寄せられた、「見常者（目でものを「見て」いる人）」と「触常者（さわってものを「みて」いる人）」が協働で「いけばな」に挑戦しよう！というアイデアから生まれ、実現したもの。

作品づくりを単発のイベントで終わらせるのではなく、参加者が様々な角度から多様性について気づき・学ぶ参加体験型の講座と、イベントの企画会議を併行して行い、そのプロセスを楽しみながら、最終回に「いっしょにいけばな」ワークショップを開催、全員でいけばな作品をつくるという試みだ。

講座では、ファシリテーション・映像表現・いけばな・バリアフリー研究のプロフェッショナルがそれぞれワークショップを展開。のべ74名の参加者が、多方面から「自然との対話」「かかわりあい」などを学ぶ場となった。

最終回の「いっしょにいけばな」ワークショップは7月11日に開催された。

朝の清浄な空気の中、丁寧に「歩くこと」「食べること」に集中することで、日常の中に埋没しがちな根源的な営みの意味を改めて問い直す時間を過ごした。

朝食の調理を担当した小池容子さんは「斬新な取り組みで喜んで協力した。食に対する想いをみなさんと共有できたのがうれしい。ぜひまたやりたい」と語った。

映画会や公園でも対話を―
「いま・ここ」考える場に

13年7月25日の夜、つくば初の「スロー・シネマ・カフェ」が開催され、35名が集った。これは、スローな映画を題材に、人と人、人と自然、今の世代と未来の世代のつながり直しの場づくりを提案する自主上映ムーブメントで、この日上映された作品は、現代エコロジー思想の巨匠を追ったドキュメンタリー「サティシュ・クマールの『いま、ここにある未来』」。

上映前のオリエンテーションでは作品への期待や予備知識を共有し、鑑賞への導入とした。上映後は5人程度のグループに分かれ、作品の感想、自身の変化を共有した。

アンケートでは「グループ対話で自分の思いを整理することができた」「互いの感想を共有したことで、さらに深く作品を味わうことができた」などの声が寄せられた。

この時の参加者から、映画の中で語られた「食べる」「歩く」というキーワードを元にさらなる対話の場をもちたい、という声があがり、「緑の朝食会」という企画が誕生。同年9月28日早朝、洞峰公園に約10名が集まり

フューチャーセッション開催
地域とアートの関わり考える

12年11月にスタートしたフューチャーセッション「地域×アート＝？」には、13年度まで計7回、のべ91名が参加。講座での対話、フィールドワークを経、現在も参加者同士の「つながる」「つくりだす」が続いている。

フューチャーセッションとは、マルチステークホルダーが会し、実効性という視点を持ちつつ行われる対話のこと。今回のテーマは「地域」と「アート」。参加者はアート好きな市民、演奏家や俳優、コーディネーター、エイブルアート関係者、芸術専攻の学生、ギャラリーオーナー、自治体の文化政策担当者等々。フューチャーセッション自体への関心もあり、県外市外からの参加も多く得られた。

セッションではアートによる表現にも挑戦。問いを「5年後の地域とアートの豊かなハーモニー」へと絞り込み、「誰もがアートを通じた何かを身近な場所で共有することができる」というビジョンを言語化した。これを元に、13年夏には「アートを活かしたコミュニティスペースをつくろう」という第2弾の企画が進められた。

講座後、これまでは関わりがなかった参加者同士のコラボレーションが、展示・上演・調査等の形で実現。作り手と受け手という境界を超え、新しいものが次々に生まれている。

催。いけばな草月流師範・根木美里さんの指導のもと、様々な花材を使っていけばなを体験。触常者には、見常者が色や形などを説明、それぞれが助けあいながら自由な発想で作品づくりを楽しんだ。

最後は初夏の爽やかな風が吹き抜ける屋外に移動、高さ2メートル以上もの超大作に全員で取り組み、青竹やユリ、オンシジュームなどをふんだんに使った堂々とした作品が完成。中央ろうきんつくば支店のロビーに展示され、訪れる人々を楽しませた。

参加した触常者のひとりは「この講座で初めていけばなを体験することができた。創作を通していろいろな人と友達になれて楽しかった」と語った。

健常者ではなく「見常者」？
視点変え「違い」の豊かさ気づく

ダイバーシティ学科では、「障害者」「健常者」ではなく、多様性の一つとして個々の「違い」をありのまま受けとり、「違い」を積極的に知る各種講座を行っている。

ご自身の経験から、視覚に依拠して生活している「見常者」と、触覚に依拠している「触常者」という新たな定義を提唱している国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎さんは、「万人のための『点字力』入門」（10年11月27日）や「瞽女（ごぜ）文化にさわる」（12年12月1日）で、自身が触常者になって知った「触文化」や、耳で聞くことの豊かさと普遍性を見常者に伝えた。

また、出版ユニバーサルデザイン研究会座長の成松一郎さんの「多様性に出会える図書館」（13年12月8日）では、さまざまなニーズを持った読者の存在と、文字（墨字）が紙に印刷されている「本」だけでなく、点字の本やさわる絵本、耳で聞く録音図書、手話言語に翻訳したDVD本など、多様な本の紹介があった。

「誰かと比べて何かができない」ではなく、「認知や使う感覚、文化が違うから人それぞれ適した方法が違う」へと視点を変えることで多様性の豊かさに気づける講座は今後も引き続き開催される。

つくば市民大学　歴代テーブルクロスの秘密

10年8月3日に開かれた夏休み子ども企画「つくば市民大学のテーブルクロスに絵を描こう」。大きな布に絵を描く体験は自宅ではできないと、親子連れ34名が集まった。

講師はアーティストの彩生深怜さん。3枚の大きな布ごとに集まった子どもたちでテーマを相談、野菜やダンボールのハンコなど、様々な画材で思い思いに絵を描いた。

「ハンコをペッタンとやるのが楽しかった」

「指で描いたら綺麗な花ができた」との感想も。世界でたった一つの子どもたちのテーブルクロスが完成した。

13年3月9日の「わたし☆アートワークショップ」は、「特別な才能を持った人たちだけのもの」というイメージを持つアートへのハードルを取り払う講座となった。

ナビゲーターの野沢しきぶさんが準備した様々な画材を使って無心に手を動かすワークショップをきっかけに、自由に表現する喜びに気付かされた人も多い。

同月30日に開催された学園祭では、つくば市民大学に集う人々がそれぞれの市民大学への思いを一枚の布に描き、華やかで楽しいテーブルクロスを作り上げた。

スポーツ原点「ともに」の場づくり

いっしょに楽習会　霞ヶ浦でマリーナ交流会

つくばバリアフリー学習会との共催による「いっしょに楽習会」は、多様な人が交流してお互いを知る場として、09年9月から4年間で38回開催。「ともに」のあり方を学びあう「インクルーシブデザインワークショップ」や、当事者が伝える車イス体験会、五感をフルに使って学ぶワークショップ、訪問先と連携して「ともに」のあり方を模索する訪問企画等、多彩な講座を実施してきた。

中でも毎年開催してきたのが「マリーナ交流会@霞ヶ浦」。霞ヶ浦のラクスマリーナは、車イスユーザーの船長が誕生、活躍するバリアフリーマリーナ。ユニバーサルデザインの小型ヨット「アクセスディンギー」体験や、普通のカヌーを少しの工夫でいろんな人に楽しんでもらうことができる。

「お互いのありのままを認め合い、自然に手を貸しあってカヌーを楽しむ場は、とても居心地が良かった。こんな場所を広げていきたいと思った」と、関西での障害者カヌーの体験から活動をスタートさせた同会代表の北村まさみさん。マリンスポーツ活動は「原点」ともいえる。

楽しい場での横並びの関係と、そこから生まれる「ともに」という姿勢が、「出会わない、無知・無理解、してあげるという意識」という3つのバリアをフリーにし、人と人を近づけ、相互理解を促す。「楽習会がそのような場と機会であり続けたい」と北村さん。

伴走講座では、洞峰公園などでの実習も行われた

二人で走れば二倍楽しい！

手と手、心と心つなぐ伴走

空前のランニングブームの中、視覚障害者と晴眼者がロープで手をつないで走る「伴走」を知ってもらおうと、13年6月から10月にかけて連続講座「はじめよう！伴走！」が開かれ、のべ67名が参加した。

この講座は、伴走の実習だけではなく、B（ブラインド）組とG（ガイド）組がともに楽しむためにどのような工夫が必要か、お互いを知り、理解しあうことを主眼とした対話に重点をおいたのが特徴。前半2回では「私が走り始めたワケ」や「教えて！B組さんの生活の工夫」などをテーマに対話を重ねた。

後半2回は洞峰公園での実習。ベテランの伴走ランナーによる指導のもと、鮮やかなビブスをつけて賑やかに走る参加者の姿は人目をひき、「前から伴走に興味があったので参加したい」と声をかけてきた人も。実習中は、臨時の給水所も設営。冷たい飲み物やおやつを用意し、リラックスしてランニングを楽しんだ。

伴走サークル「バンクラブ」の山崎倫明さんは「興味をもつ人がこんなに集まってくれて嬉しい。伴走は続けてこそ。G組もB組も自ら機会を求めて行動して、一緒に走る仲間をつくばで増やしてほしい」と語った。伴走講座は今後も継続予定。

「撮る・撮られる」から新たな関係性紡ぐ

写真を通じて、自己理解や洞察、社会と自分との関係、メンタルヘルス、非言語のコミュニケーションなど、新たな気づきを得ることができる「フォトセラピー」が近年、注目されている。

つくば市民大学では、09年10月から全6回にわたって、写真家の田嵜裕季子さんによる「フォトセラピー講座」が開催された。交代で相手を撮影したり、撮影した写真を互いに見比べながら撮影者・被撮影者としての心の動きについて対話したり、屋外で自然を対象に撮影をしたりと、「写真」「撮影」「対話」を様々なアプローチから体験した。

撮影した作品は市民大学に掲示され、来校者の関心を惹いた。

VOC汚染から学ぶ　未来の美しい地球

太古から元素は同じ、人工的な組み合わせが増えただけ―。

11年秋、VOC研開催の「学びつつ思い描こう健康な地域」講座でそう気がついた。VOC（揮発性有機化合物）は、人工物から揮発する有機化学物質のため大気汚染となり毒性もある。例えばホルムアルデヒドは炭素、酸素、水素と、ありふれた元素からなるが、シックハウスの原因となる。

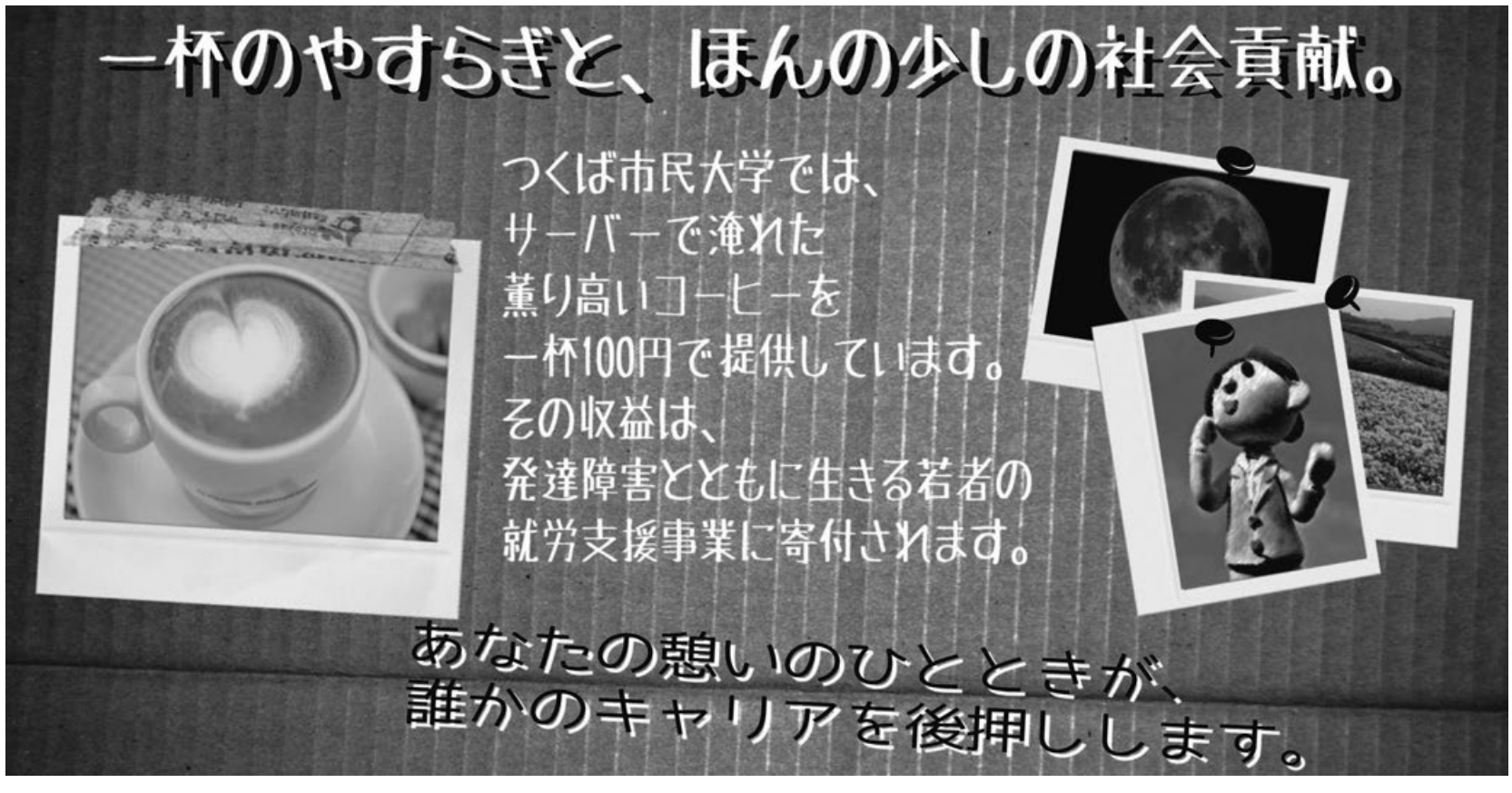
便利さと引きかえに元素をゴミにしてしまった私たち。これからはVOCを出さない仕組みが増えることを願いたい。

笑いでストレス克服　糖尿病を吹きとばせ

10年10月から11回にわたり脚本家の冠木新市さんとの共催で開催された「スマイルアップ・セミナー」は、糖尿病を始めとする病気の原因はストレスなど社会的な要因と考え、笑いでそれを克服することを提案、実行するもの。

健康体の「ハッピーキャラ」をつくり、今の自分は病気でも、そのキャラになりきることで笑いが生まれ、実際に変化があることを体験した。

事例として、つくば市の歴史や文化、科学を背景とした冠木さん制作の架空の物語を紹介、野口雨情が残した実在のつくば節の歌と踊りなど、虚実ないまぜの世界に参加者を誘った。確かに夢中になれることがあると病は逃げていきそうだ。



エネルギーの未来像

のべ280名で対話

枝廣淳子さんの特別講座も

エネルギーの問題を一人ひとりが引き受けてともに考える講座「ともに学び、考えよう～持続可能なエネルギーの未来～」は、講座参加者の「思い」で足かけ3年の長きにわたり実施された。

この講座は11年秋から開催。大切にしたのは、二項対立を超え、立場や価値観の違いを認め、お互いを尊重して語りあい、聴きあい、多方面から「ともに」考えるということ。そのために大切な「対話の作法」も共有、実践しながらの講座となった。

毎回熱心な対話が続いたエネルギー講座

第1シリーズでは、自然エネルギーを推進しているオーストリアや岩手県葛巻町とスカイプで結んでの話題提供と対話、第2シリーズでは「みんなのエネルギー・環境会議」の映像を共有、多様な取り組みや論点があることを学んだ上で、次の第3シリーズとあわせて対話を重ねた。

11年12月25日には、環境ジャーナリストの枝廣淳子さんをゲストに迎えた特別講座も開催。これを受け、自分たちができる行動を考えた第4～第6シリーズ、13年の学園祭でのイベントを企画・準備する第7シリーズへと続いていった。

学園祭では、CO2を考える紙芝居、低炭素社会研究の成果を市民に分かりやすく伝える岩渕裕子さん（国立環境研究所）の講演と対話、体験ブースなどが好評を博した。

全7シリーズを通じて参加した鎌田勲さんは「この講座をきっかけに、市内外で開催されるさまざまな研究会や講演会に足を運ぶようになりました。これからも学びを深めていきたいと思います」と語った。

松下村塾での人材育成学ぶ

10年5月29日、法政大学教授・日本産業カウンセラー学会会長の桐村晋次さんを招き、「松下村塾の人材育成」が開催された。33名の参加者は、自発的・内発的な「学び」の楽しさを、吉田松陰の方法論からそれぞれ感じ取った。終了後の交流会にも20名近い方が残って歓談が続いた。

あなたの子育てどうですか？

共感から始まる創造の輪

13年6月22日、認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所とつくば市民大学の共催により、未就学児の保護者を対象とした保育付き座談会「共感と発見のための『子育てどう（Do）？』トークカフェ」が開催された。

座談会は、茨城県の子育て・子育ち環境の充実を図るプロジェクトの一環として、県内で子育てに関わる人々の生の声を集め、具体的な提案に繋げるきっかけをつくるために開かれたもの。

会場では、子どもとの関わり方、女性の働き方、発育について等、様々な話題が出た。「ついつい感情で怒ってしまう」との発言に共感し合うなど、母親達は日々の忙しい時間を忘れお茶と会話を楽しんでいた。「自らもこのような企画に関わりたい」との声も寄せられた。

集まった声や活動の詳細は同法人ホームページで紹介されている他、情報や意見が交換できる場としてフェイスブックページが運営されている。

同法人との共催講座には、その他にも教育に関する講座として「読み書きに困難を示す子どもたちへの理解と支援」や「いじめ防止プログラムワークショップ」がある。

障害は関わり方で「個性」へと変わる

映画「DXな日々」上映会と主人公の「美んちゃん」こと砂長宏子さんとのトーク会が13年11月24日に開かれた。DX（ディスレクシア）とは読み書き障害のこと。英語圏では教育支援が手厚いが、漢字を混合して使う日本では研究が始まったばかりで社会の認知度も低い。

ユニバーサルデザインコンテストで準グランプリを受賞し、ユーロデリという小さな惣菜屋を開いて同じ障害を持つ人々とともに働く場をつくった砂長さん。「小学校の時に支援を受ければ未来が変わる」と、大きな笑顔とともに具体的なアドバイスや励ましの言葉をかけていた。

科学の街つくば

研究機関との連携続々

継続開催されている「つくろう！科学の輪」は、学研労協と市民大学の共催によるサイエンス・カフェ。「南北両極に広がるオゾンホールとその今後」をテーマにした12年3月3日の回では、国立環境研の中島英彰さんをゲストに語り合った。中島さんは南極観測隊に90年、07年に参加、その時に持ち帰った南極の氷を水に浮かべて試飲するイベントでは、1万年前の南極の大気がプチプチと音を立てながら水に溶け出す様子を目と耳と口で楽しんだ。

10年9月23日、夢追いサロンつくばと市民大学の共催により、バイオマス利活用の講座が開催された。近隣都県から技術と想いを持った14名が集結。農研機構の柚山義人さんがつくば3Eフォーラムの活動紹介を行った後、ワークショップで社会実験のアイデアを練った。農を軸とし先端技術と相互扶助の精神を盛り込んだ「つくば楽農ランド構想」などの提案があり、柚山さんは「環境モデル都市つくばの施策に市民力を活かしたい」と意気込んだ。

2010年7月からスタートしたこの番組も
20014年5月27日で200回目を迎えます。
つくば市民大学の講座情報はもちろん
人気のブックレビューコーナーでも、
小説、エッセイ、社会科学系、などなど
さらに縦横無尽に紹介中！
ウニベルシタスつくば代表幹事
徳田太郎と謎のDJトーゴーの
軽妙なトークと素敵な音楽で送る
30分をお楽しみください。
曲のリクエストはmail:info@tsukuba-cu.net

対話重視のお買いもの教室

親子で「お金」を話す好機に

消費者教育推進法の施行により、地域における消費者教育の充実が求められる中、13年8月10日に公開講座「おやつは300円！？ロッキーといっしょにお買いものゲーム」が開催された。本講座は、買いもの模擬体験を通じて、お金の価値や社会の仕組みを親子で学ぶことを目的として開催されたもの。近隣地域から親子連れ15組38名が参加した。

決められた予算内でお弁当の材料を買う子どもたち

お金に関する教育には多くのテーマがあるが、本講座では特に親子での対話が重視された。ゲームの前半は、子どもたちの自主性にまかせ、模擬紙幣を手にスーパーに見立てた「ロッキーマート」で買いもの体験。産地や加工方法、利便性など特徴を記した商品カードの中から、お弁当に必要な材料を選んでいく。買いものの後は、買った材料をもとに親子でお弁当の絵を描いて、参加者同士で絵を見せ合いながら「どんなお弁当を作ったか」「なぜこの商品を選んだか」を共有した。

後半は「親チーム」「子どもチーム」に分かれ、「お金を使うときに大切にしたいことカード」を用いた話し合い。子どもチームからは、「余計なものを買わないようにする」「売り切れる前に早く買うことが大切」などの発表があった一方、大人チームからは「お小遣いは働いたお金の一部。お金のありがたみを理解してほしい」などのメッセージが伝えられた。

参加者からは、「家庭でお金をテーマに話し合う機会が少ないので来てよかった」「ぜひ学校などでも取り入れてほしい」といった声が寄せられた。

車イス 移乗・回転ラクラク

トイレのバリアフリー化実施

10年11月、つくば市民大学のトイレが改修され、バリアフリー対応となった。男女それぞれに車イス用トイレがある例はそう多くない。

トイレには、さまざまな工夫が盛り込まれている。無理なく回転できるスペース、移乗のための手すり、水栓に手が届くよう足元が空いた洗面台、目線の高さを考慮した鏡、開閉しやすい吊り式横引き戸やレバー状の鍵など、車イスでの移動の特性が考慮されている。

改修には、福祉住環境コーディネーターの資格を持つ車イスユーザーも設計段階から参画。ユーザーからの「ひざの上に持っている荷物を置く棚が必要」との意見から、個室内に手荷物置き棚が設置された。また「ペーパーホルダーは手すりの上だと干渉し、下だと使いにくい」という声を考慮し、可動式U字手すりの内側にホルダーが設置されるなど、小さな工夫が積み重ねられた。

多様な障害者のすべてのニーズに応えるのは難しいが、車イスユーザーも安心して市民大学に参加しやすくなったことは確実。改修関係者の尽力の賜物だ。

お天気教室・木工教室…

夏休みの自由研究を応援

12年8月18日、夏休み特別企画「親子向けお天気教室」が開催された。中央ろうきん助成プログラムの助成先で、主にママさん気象予報士で構成される一般社団法人日本気象予報士会サニーエンジェルスを講師として開催された本講座には、親子連れ10組25名が参加した。

夏休みの自由研究にも活用できるように、お天気に関するクイズや、ペットボトルで雲を作る実験、風速を測るゲームなどを実施し、お天気や科学に親しんでもらうアットホームな時間となった。

学園祭の人気企画「車イスでトイレに行こう」を担当する車イスユーザーの藤田典子さんは「実際に体験してもらうことで車イスでの動きを知り、『大変だからかわいそう』でなく、環境次第でいろいろと可能になるということを理解してもらえるとうれしい」と語った。

この他、親子向けの企画として、11年の夏休みには木工教室が、冬休みにはバードウォッチング教室が開催されている。

シニア世代の第三の居場所

「サロン・ド・ボヤキ」好評

家庭でもない、職場でもない、それが第三の居場所。色々な人が目的なしに集まって話ができる。そこから何かが生まれるかもしれない。そのような可能性を求めてつくば市民大学は11年末、「サロン・ド・BOYAKI」を開設した。

第一線を退き、家庭に引きこもりがちな人たちを対象に気軽に集まり、話ができるサロンとして、毎週木曜午後に開催。今年で3年目となるが、参加者による実践の提案も出ている。「市民の目で見た海外の国ぐに」はボヤキから生まれた講座の一つ。学童保育経営者の話を聞き、子ども相手のボランティアを始めた人もいる。

今後、このサロンが高齢者の「居場所」から「出番」の場になることが期待される。

緑と人をつなぐNPOの新潮流

09年2月14日、つくば市民大学オープニング特別講座として、人と自然が共生できる社会づくりを実践するNPO法人バースとNPO法人グリーンワークスを招き、「緑のNPO新しい潮流」が開催された。市民の眠っている力を引き出すノウハウや、協働をコーディネートする具体的な方法が紹介され、公園や身近な緑を「人と自然、人と人との出会いの場」にする道すじが示された。参加者からは「つくば市にもこのようなNPOの活躍できる場がほしい」などの声が聞かれた。

色とりどりの風船 童心に戻れる時間

細長いバルーンが、あっという間にイヌの顔に変わる。見ているだけならば驚いたり、喜ぶ場面だが、受講者は真剣そのもの。震える指先で風船をねじってとめる。10年1月30日、「ようこそバルーンマジックの世界へ」の第1回。様々な動物や花をつくる基本を学びながら、色とりどりの風船とたわむれ童心に戻る。「結婚式のお祝いにお花のバルーンを花束にしてプレゼントされた方もいるんです」と講師のポレポレさん。アイデア次第で暮らしの中でも役に立つアイテムのようだ。

「ちょっと昔」に学ぶ講座続々

つくば市民大学では「ちょっと昔」をキーワードに、昭和の社会情勢や人々の暮らし方を振り返り、現代に生かしていく知恵を模索する講座を継続して開催している。

コミュニティ学科では、12年10月6日に「昭和を語る」を開催。昭和を伝えるシニア世代が持ち寄った思い出の品をもとに世代間の交流を図ろうという趣旨。終戦間際に慌ただしく配布されたガリ版刷りの尋常小学校卒業証書を持参し、当時の思い出を語る人、戦争中、家族とともにたどった長春から中ソ国境ハイラルまでの地図を示しながら、国家と国民の悲劇について思いを語る人など、さまざまな立場から昭和が語られた。後半は4つのグループに分かれて対話の時間を設け、「昭和」とはどのような時代だったかを語り合った。

サステナビリティ学科では、13年2月11日に「ちょっと昔のくらしとエネルギー」を開催。認定NPO法人宍塚の自然と歴史の会理事の阿部きよ子さんが、里山の暮らしを地元の方に聞く「聞き書き」から見えてきた省資源・持続可能な生活サイクルを紹介。昔使っていた火鉢を囲み、同時代を経験した参加者の話も共有した。

同年11月4日には、つくば市神郡にある移築古民家で「ちょっと昔の住まいとくらし」を開催。里山建築研究所の案内で、移築時に茅刈りから屋根葺き、土壁塗りなど多くのボランティアが関わる過程で見えた、資源循環型の建築の知恵を見学した後、地元の方の指導でしめ縄作りを体験した。参加者からは「里山の人達の生活の知恵、無駄のない循環型の暮らしを知ることができました」などの感想があった。

「つくば公園でお弁当」始動！

顔の見えるつながり生み出す

つくば市は150を超える公園が立地する全国でも有数の「公園先進都市」。この立地を活かし、公園をより身近に、そして気軽に楽しみながら、血縁・地縁・社縁とは異なる「かかわりとつながり」を育んでいくための仕組み・仕掛けとして、つくば市民大学発のムーブメントが始動した。

「つくば公園でお弁当」は、「日曜日のお昼ごはんは、公園でお弁当を食べよう」と呼びかけるだけのシンプルな取り組み。人と人とのかかわり、ゆるやかなつながりをつくり、育てることを目的に開始された。

第1回は13年10月8日に開催。月に一度開催されている「つくいち」に集まった人々で賑やかな中央公園・芝生広場にレジャーシートを敷き、ロゴが大きく印刷されたノボリや、緑色のバンダナなどの「つくば公園でお弁当」グッズをひろげていると、ツイッターやフェイスブックなどで興味をもった人が集合。さわやかな秋風が吹く中、のんびりとお弁当を楽しんだ。

参加者の一人は、「大掛かりなイベントではなく、気が向いた時にふらりと立ち寄れる場所での開催というのが気軽でいい。お弁当だけではなく、読書会など別のイベントも企画してみたい」と語った。

14年3月には、「『みんなの公園』をつくる！」と題したフューチャーセッションを2日間にわたり開催。身近な公園を楽しむためのアイデアが次々に生まれ、現在、実施のための準備が進められている。つくばの公園は、ますます面白くなりそうだ。

「大池は命綱」

里山入門講座開催

自然とともに循環型の暮らしをしてきた里山の自然と歴史、人々の文化や暮らしの知恵を学ぶことを通して、サステナビリティ（持続可能性）について考える講座「里山入門」が開催されている。

この講座は、認定NPO法人宍塚の自然と歴史の会との共催で12年度2学期から開催。世界的にも生物多様性の高い貴重な場所であることを学ぶ「生物多様性と里山」、地元の方の話から昔の暮らしについて知る「聞き書きからみえてきたこと」等、さまざまな側面から学ぶ講座となっている。

同年3学期には、子ども達がいきいきと「自ら育つ」のを目の当たりにしている人たちの話を聞く「里山は人を育てる～子どもから大人まで」を開催。日々の暮らしとは縁遠くなったが、現代でも人にとって不可欠な場所であるとの思いを共有する場となった。

13年度には、年間を通し、座学と現地を歩いて学ぶ「里山入門Ⅰ」を開催。10月12日の歴史編第1回では、同会の阿部きよ子さんの解説で宍塚の集落を歩きながら、地元の方から家に使われている里山の木材の話を聞くなどした。

団塊男性よ、地域へ！

求められるは「協調性」？

10年4月3日、さいたまNPOセンター理事の東一邦さんを招き、「地域デビューのススメ」と題した公開講座が開催された。参加者は33名。

12年には団塊世代最初の人たちが65歳になり地域に帰ってくることを視野に、地域で活動する埼玉県の女性リーダー（106名）への「新たな男性メンバーに何を期待するか」とのアンケート結果が紹介された。答えは「力仕事」。また、どんな男性に参加して欲しいかという問いには「協調性のある人」。現役時代の経験や権威は、地域においては期待されていないことがあらためて浮き彫りとなった。

これまでの日本では、「会社は男、地域・家庭は女」という役割分担や意識が定着し、ともに活動する場が少なかった。東さんは「戦後民主主義で育った大量の団塊世代が地域社会で活動することで、今まで経験したことのない新しいモデル、新しい地域文化を作りだせるのではないか」と締めくくり、エールを送った。

講座では、NPO法人並木会など、実際に地域で活動している「先輩」の事例も紹介され、参加者が一歩を踏み出すきっかけを提供した。

生き物・自転車…

地域の地図自らの手で

公開講座「地域デビューのススメ」の参加者からの提案で賛同者が集まり、10年7月、「私たちの生きている地域の地図づくりの会」が発足した。

同会は「生き物地図グループ」「自転車用道路地図グループ」に分かれて活動を開始。生き物グループは定性的な観察とアンケート調査を行い、その結果を地図に表現するとともに、詳細な報告書を完成した。

自転車グループは実際につくば市内の各所を走り、ユーザー目線での評価を地図に落とし込むとともに、道中で生き物情報を収集、生き物グループへ提供した。現在は「つくばリンリン倶楽部」と名称を変え、メンバー6名で活動中。

協働・連携で新たな一歩を

市民活動交流会開催

NPO・ボランティア・自治会…。様々な形で市民活動を行なっている団体は数多くあるが、団体同士の「横のつながり」は見えにくいのが現状。つくば市民大学では12年度、各団体が交流することにより、それぞれの発展につなげていく「市民活動交流会」を開催し、全4回でのべ32名が参加した。

また、13年2月16日には、市民活動団体と行政・企業等との協働のあり方に焦点を当てた「つくば市民活動・協働フォーラム」を開催。つくば市市民活動課、つくば市社会福祉協議会の担当者や市民団体代表など33名が参加し、市民活動の現状・課題を共有し、今後の活動の活性化へとつなげた。

松下村塾目指し「自営力」を養成

NPO法人よかっぺいばらきとつくば市民大学の共催講座「時代を生き抜くローカルエコビジネスを考えよう～夢なき者に成功なし」が13年10月から5回にわたり開催された。

労働環境の激変により、新卒者の定年までの安定雇用が当たり前とは言えなくなってきている。また、人生におけるつまずきや障害により雇われる働き方が困難な人々も増加している。一方で、若者や定年退職者による本格的な社会事業の取り組みが活発になってきている。

この講座は、こうした社会認識のもと、組織に頼らず個人が起業・経営する力を、学びあいと助け合いで培っていこうという目的で企画・実施された。

防災・協働・農業

地域課題語り合う

NPO法人スマイル・ステーションの「楽楽大学」は、「誰でも先生、誰でも学生、どこでも教室」をキャッチコピーに、広く市民に開かれた大学である。

この大学では12年から「TSUKUBA（筑波山が見える地域）を語ろう」というテーマで地域の特徴的な話題を取り上げ、講師による話題提供と参加者を交えて語り合う講座を開催しているが、つくば市民大学のコンセプトとも重なるところがあり、いくつかの講座を共催で開催してきた。

これまでの実績は、「私たちの防災」「TSUKUBAの市民活動（協働）」「でぇがい！TSUKUBAの農業」。今後も引き続き開催の予定。

「その悩みを大切に」

玄田有史さん、ロスジェネを語る

09年2月22日、つくば市民大学のオープニング特別講座として、ニート・フリーター問題にいち早く切り込んだ気鋭の労働経済学者、玄田有史さんを招き、未来をつくるための方法を語り合った。

「ロストジェネレーションの仕事道」と題されたこの講座で、ゲストの玄田有史さん（東京大学社会科学研究所教授）は「何かと不安なことがたくさんあるこの時代だからこそ、悩みながら歩き続ける人の方が、いい仕事もできるし幸運にもめぐり会える」と、あたたかな口調で語った。

講座の後半は、参加者一人ひとりと玄田さんが、そして参加者同士が、働くこと、学ぶことについて、じっくりと対話する場が持たれた。参加者の一人は「今、ニートでいることは、未来を見つめる大切な時間なんだと気がつきました。働くことはまだまだ怖いけれど、ここに参加したことが小さな一歩です」と語った。

講座の最後には、つくば市民大学への期待として、玄田さんから「家庭や職場と並ぶ、私たちにとって必要不可欠な『第三の場所』として、対話による学びの空間を育んでほしい」という励ましの言葉が送られた。

小ネタ持ち寄り仲間づくり

「弱い絆」で就活乗り切る

就職活動に役立つワークをしながら自分を見つめ、ゆるやかな仲間をつくるきっかけづくりを目的とした講座「就活ウィークタイズ」が、10年12月16日に開催された。

ウィークタイズ（弱い絆）とは、身近でなく、やや疎遠、または日頃はそれほど交流のない人々との絆のことを指す。米国の研究では、「弱い絆」からの情報で転職を行った方がより満足度が高い、などの結果が見られている。

当日の参加者は、今まで一人ひとり工夫してきた就職活動のコツを互いに共有し、今後の就活へのヒントとした。この日の成果は「就職活動に役立つ小ネタ集」という小冊子にまとめられた。

就職氷河期のキャリア形成に

11年度に計6回開催された「Myキャリア相談室」。当時は長い不況下、就職氷河期といわれ、不採用を繰り返した後に「引きこもり」となる若者が多かった。そうした若者に少しでも元気になってもらえないかと始められたのが当相談室である。

しかし、実際に訪れたのは比較的元気な方々であった。本当に支援の必要な人に思いを届けるにはどうすればよいか―という課題意識は、現在も「つくば発達障害キャリア支援ネットワーク」などに引き継がれている。

就労訓練の一環

自ら講座を企画

13年10月1日、「聴く力・話す力を高めるワークショップ」が開催された。この講座を企画・運営したのは、「つくば発達障害キャリア支援ネットワーク」の一員であるカフェ・ベルガで就労トレーニングを受ける訓練生たち。画期的なのは、自分たちで講座を企画し、告知や調整、準備や受付などを行う、その一連のプロセス自体が訓練の一環となっている点である。訓練生たちは、当初は広く告知して実施することに不安も感じていたが、無事に終えることができ、確かな手応えをつかんでいた。

少人数でじっくり「対話」のあり方を学ぶ

対話から見出す「希望」

ダイアローグ・カフェ開催

関わること、働くこと、生きることにおいて、どのように「希望」を見いだし、育んでいくかを考え、実践していく対話の場『希望』をめぐるダイアローグ・カフェ」が、11年2月～3月にかけて開催された。

「あなたにとっての『未来』を色で表すと？」「『希望』を色で表すと？」「『未来』と『希望』の色の違いはどこからくるのだろう？」などの問いを重ねるうちに、「希望」について語りながら自分を語り、社会を語り、世界を語るという、濃密な時間となった。震災の影響で3月6日以降は中止となったが、被災地を支援する「希望をつなぐ」プロジェクトへとつながった。

400名が対話の心学ぶ

ファシリテーター育成講座

つくば市民大学が開学以来大切にしていることの一つに「対話」があるが、そのあり方・やり方を学ぶのが「対話ファシリテーター育成講座」だ。第10期までにのべ約400名が、創造的な変化を醸しだす「話しあいの知恵」を学んでいる。

対話（ダイアローグ）とは、テーマ（問い）に関する思いや考えを深めあったり、新しい知恵を紡ぎだしたりするために行う話しあいのこと。立場や価値観の違いを認め、互いを尊重しながら、集いあい、問いあい、語りあい、聴きあうという姿勢は、つくば市民大学の各種講座の基盤となるのみならず、地域や職場でも求められる。

しかし、単なるおしゃべりで終わってしまったり、説得と反論の場になってしまったりと、なかなか「対話」にならないことも多い。そこで求められるのが、対話の場をつくり、参加者同士が響きあうよう働きかけるファシリテーター（支援者・促進者）である。

講師を務めるのは、ウニベルシタスつくば代表幹事の徳田太郎。1都7県から参加者が集う人気講座だが、中には岩手県から1泊2日の小旅行を繰り返し全3回の日程を修了する人も。

14年3月からは、参加者有志による「ファシリテーション・フォーラム実行委員会」も誕生し、7月のイベント開催に向けて準備を進めている。

「性別」や「国籍」当たり前を疑う

「『あたりまえ』を疑えば世界はこんなにも豊かだ！」シリーズでは、これまでに「性別」「国籍」をテーマとしたワークショップが開催された。

13年3月23日の「男子、女子、そうでない人？」では、「女性専用車両に乗れるのは誰？」「『誰でもトイレ』は誰のため？」などのワークで、どうすればすべての人が「ありのままに、心地よく」生きられる社会になるかを対話を重ねて考えた。このワークショップは好評のため同年6月15日にも「再演」、富山や神戸からの参加者もあった。

14年3月16日には、『私たち日本人』は、本当に『日本人』？」と題し、かながわ開発教育センター事務局長の木下理仁さんを招いて、朝鮮学校の高校生と日本人の高校生の交流と友情を描いた映画『まとう』を題材に対話を行った。

参加者の一人は「理解したつもりにならず、考え続けることが大切だと痛感しました」と語った。

つくば市民大学 開講講座一覧

連続講座は各学期の初回のみを掲載。

08 年度

01.21 オープニングセレモニー・記念フォーラム

02.14 特別講座：緑のＮＰＯ新しい潮流
02.19 ワークショップ：つくば市民大学をつくろう！
02.22 特別講座：ロストジェネレーションの仕事道

03.01 ワークショップ：つくば市民大学をつくろう！
03.15 特別講座：解決できない借金問題はない

09 年度

05.19 ＮＰＯと社会起業家
05.23 あなたのお金が社会を変える！？

06.01 アメリカの市民パワーの秘密
06.09 ＮＰＯアシスタント講座
06.13 一歩ふみだすキャリア養成講座
06.21 カフェテラス・デー

08.08 夏休みはじめて体験！親子の木工教室

09.05 バリアフリー・いっしょに楽習会
09.11 ＮＰＯと社会起業家
09.15 海外留学のための英語スペシャルレッスン
09.26 一歩ふみだすキャリア養成講座
09.27 協働のためのファシリテーション

10.10 心に効く住まい方
10.17 フォトセラピー講座
10.23 カフェテラス・デー

12.10 ＮＰＯ設立から学ぶ新しい生き方へのヒント
12.10 海外留学のための英語スペシャルレッスン
12.12 ロボットナースに愛をこめて
12.16 認定ＮＰＯ法人セミナー
12.16 ＮＰＯ法人会計基準策定プロジェクト全国キャラバン

01.09 冬休みはじめて体験！お気軽バードウォッチング教室
01.16 フォトセラピー講座
01.24 「関わり方」の知恵を探る
01.24 バリアフリー・いっしょに楽習会
01.28 カフェテラス・デー
01.29 フードバンク講座
01.30 ようこそバルーンマジックの世界へ
01.30 新糖尿病文化セミナー

02.05 多文化共生講座
02.13 一歩ふみだすキャリア養成講座
02.25 日本初・討議型意識調査の衝撃

03.04 シニア初心者向けパソコン講座

講座数	242
開催回数	745
受講者数	6,929
利用者数	11,720

10 年度

04.03 団塊世代セミナー・地域デビュー」のススメ
04.13 分類と系統：人間・自然・世界を見るまなざし

05.08 Ｈｏｗ ｔｏ「Ｃｏｍｍｕｎｉｔｙ Ｐｈｏｔｏ Ｐｒｏｊｅｃｔ」講座
05.09 多様性に気づく、多様性を築く
05.15 バリアフリー・いっしょに楽習会
05.29 松下村塾の人材育成
05.30 ありがとうレターを書こう！

07.03 私たちの生きている地域の地図作りの会
07.07 ロボットナースに愛をこめて
07.14 多文化共生に向けた市民と行政の役割
07.17 体験レッスン・小学校英語をもっと楽しく！
07.20 「関わり方」の知恵を探る
07.25 あなたの「なりたい自分の実現」を応援するキャリア養成講座
07.29 家族の写真を撮ろう

08.03 テーブルクロスに絵を描こう！
08.08 あたらしい「新しい公共」フォーラム
08.14 夏休みはじめて体験！親子の木工教室
08.28 読み書きに困難を示す子どもたちへの理解と支援
08.31 人材の可能性を引き出しすべての人がＨａｐｐｙ！な関係を構築する

09.05 バリアフリー・いっしょに楽習会
09.11 私たちの生きている地域の地図作りの会
09.23 つくば３Ｅフォーラム
09.28 あたらしい「新しい公共」フォーラム
09.28 美と健康・歩きながら自分スタイルづくり

10.03 スマイルアップ・セミナー
10.06 「ＮＰＯ法人会計基準」学習会
10.07 心と体・健康に役立つアロマセラピー講座
10.10 「かかわり」のファシリテーション
10.17 からだマネジメント、心と体の健康維持
10.30 あなたの「なりたい自分の実現」を応援するキャリア養成講座

11.27 万人のための点字力入門

12.16 就活ウィークタイズ
12.22 地域のブランディングとスマートコンシェルジュ

01.15 私たちの生きている地域の地図作りの会
01.15 偉人達の生き様、そして偉人達が学んだ古典を通じて学ぶ人間学
01.15 日本大衆文化と「人形の家」
01.22 スマイルアップ・セミナー
01.28 なりたい自分になる！一歩踏み出すキャリアデザイン養成講座

02.19 読み書きに困難を示す子どもたちへの理解と支援
02.20 「希望」をめぐるダイアローグ・カフェ
02.20 カフェテラス・デー
02.22 日常使いのアロマセラピーとカラーセラピー
02.27 バリアフリー・いっしょに楽習会

03.02 寄付社会とＮＰＯ～寄付者に選ばれるＮＰＯになるための実践講座
03.08 エクセレントリーダーへの道

11 年度

05.07 Ｍｙキャリア相談室
05.10 一家の健康を化学物質空気から守ろう
05.11 寄付社会とＮＰＯ～寄付者に選ばれるＮＰＯになるための実践講座
05.19 日常使いのアロマセラピーとカラーセラピー講座
05.26 対話カフェ

06.02 私たちの生きている地域の地図作りの会
06.18 親子で学ぶ人間学

07.09 マインドフル・リスニング講座～傾聴の基礎
07.28 私たちの情報発信基地をつくろう～ミニＦＭ局づくりワークショップ
07.31 バリアフリー・いっしょに楽習会

09.02 福島乳幼児・妊産婦ニーズ対応プロジェクト～ママカフェｉｎつくば
09.03 私たちの生きている地域の地図作りの会
09.03 防災ラジオドラマをつくろう
09.04 かかわりのファシリテーション
09.06 学びつつ思い描こう健康な地域
09.17 一家の健康を化学物質空気から守ろう
09.22 ブックトークカフェ

10.04 寄付社会とＮＰＯ～寄付者に選ばれるＮＰＯになるための実践講座
10.05 ともに学び、考えよう～原発事故とエネルギー問題のこれまでとこれから
10.13 ｆａｃｅｂｏｏｋ勉強会＠つくば（初心者向け）
10.15 Ｍｙキャリア相談室
10.15 バリアフリー・いっしょに楽習会
10.20 しあわせ創り講座
10.22 読み書きに困難を示す子どもたちへの理解と支援
10.23 スマイルアップセミナー～糖尿病を改善する音楽ショーのつくり方

11.03 発達障害の力を活かしソーシャルビジネスを確立するＫａｉｅｎの挑戦
11.26 なりたい自分になる！一歩踏み出すキャリアデザイン養成講座

12.15 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
12.20 企業・ＮＰＯ・地域団体向けのｆａｃｅｂｏｏｋ活用勉強会
12.25 新しいエネルギーの未来へ向かって～私たち一人ひとりにできること

01.08 ブックトークカフェ
01.08 対話ファシリテーター育成講座
01.10 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
01.11 ともに学び、考えよう～原発事故とエネルギー問題のこれまでとこれから
01.24 街まるごとｗｉ－ｆｉ＆ｆａｃｅｂｏｏｋ化プロジェクト
01.31 ｆａｃｅｂｏｏｋ勉強会＠つくば（初心者向け）
01.31 企業・ＮＰＯ・地域団体向けのｆａｃｅｂｏｏｋ活用勉強会
01.31 ｆａｃｅｂｏｏｋトレーナー養成講座

02.02 シャッフルトーク・組織の活性化を考える
02.26 バリアフリー・いっしょに楽習会

03.03 つくろう！科学の輪
03.08 福島乳幼児・妊産婦ニーズ対応プロジェクト～ママカフェｉｎつくば
03.17 サイエンス・カフェ～人工光合成が拓く未来

12 年度

04.01 ブックトークカフェ
04.01 対話ファシリテーター育成講座
04.05 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
04.18 ともに学び、考えよう持続可能なエネルギーの未来
04.21 いっしょに楽習会
04.29 「引き寄せの法則」セミナー

05.29 なりたい自分になる！一歩踏み出す自分養成講座

07.29 つくろう！科学の輪

08.02 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
08.05 ブックトークカフェ
08.05 対話ファシリテーター育成講座
08.05 おためし！わたし☆アートワークショップ
08.08 ともに学び、考えよう持続可能なエネルギーの未来
08.18 夏休み特別企画・親子向けお天気教室
08.22 ＮＰＯ組織基盤強化プロジェクト

09.01 ソーシャルメディア×地域活性化ワークショップ
09.23 いっしょに楽習会
09.25 里山入門
09.29 ｆａｃｅｂｏｏｋブラッシュアップ講座
09.30 楽楽大学・ＴＳＵＫＵＢＡを語ろう

10.02 楽しいコミュニケーション講座
10.06 昭和を語る、昭和を伝える
10.09 市民活動支援施設の魅力アッププロジェクト
10.11 時代を生き抜くローカルエコビジネスを考えよう
10.16 かんたん手相教室
10.18 市民活動交流会
10.28 コミュニティサポーター養成講座

11.03 つくろう！科学の輪
11.29 フューチャーセッション・地域×アート＝？

12.01 瞽女文化にさわる
12.02 ブックトークカフェ
12.02 対話ファシリテーター育成講座
12.03 楽しいコミュニケーション講座
12.04 里山入門
12.05 ともに学び、考えよう持続可能なエネルギーの未来
12.06 時代を生き抜くローカルエコビジネスを考えよう
12.07 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
12.08 自分を磨いて自分力ＵＰ！
12.12 市民活動交流会

01.12 歴史トークカフェ
01.22 かんたん手相教室
01.25 フューチャーセッション・地域×アート＝？
01.26 いっしょに楽習会

02.02 広げよう！深めよう！アイスブレイク講座
02.09 コミュニティサポーター養成講座
02.11 ちょっと昔のくらしとエネルギー
02.12 定住外国人との共生に関する連続円卓フォーラム
02.16 つくば市民活動・協働フォーラム
02.24 市民の眼で見た海外の国ぐに

03.02 つくろう！科学の輪
03.09 わたし☆アートワークショップ
03.23 あたりまえを疑えば世界はこんなにも豊かだ

13 年度

04.04 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
04.07 ブックトークカフェ
04.13 歴史トークカフェ
04.14 コミュニティサポーター養成講座
04.18 時代を生き抜くローカルエコビジネスを考えよう
04.20 市民の眼で見た海外の国ぐに
04.21 対話ファシリテーター育成講座
05.09 フューチャーセッション・地域×アート＝？
05.19 いっしょに楽習会
05.28 里山入門
06.08 はじめよう！伴走！
06.09 描こう、つくば市民大学の未来とわたし
06.15 あたりまえを疑えば世界はこんなにも豊かだ
06.22 共感と発見のための子育てどう（Ｄｏ）？トークカフェ
06.30 対人支援のための観察力トレーニング講座
07.21 映画トークカフェ
07.25 スローシネマカフェ
08.01 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
08.04 ブックトークカフェ
08.10 歴史トークカフェ
08.10 ロッキーといっしょにお買いものゲーム
08.11 スローシネマカフェ延長戦！
08.18 映画トークカフェ
08.18 対話ファシリテーター育成講座
08.24 つくろう！科学の輪
09.05 フューチャーセッション・地域×アート＝？
09.11 つくば市民活動交流会
09.11 実践！市民団体のファンドレイジング講座
09.21 はじめよう！伴走！
09.28 緑の朝食会ｉｎ洞峰公園
10.01 聴く力・話す力を高めるワークショップ
10.05 フォーカシング勉強会
10.12 里山入門
10.19 市民の眼で見た海外の国ぐに
10.26 いじめ防止プログラムワークショップ
11.03 いっしょに楽習会
11.04 ちょっと昔の住まいとくらし
11.09 身近な事例で学ぶこれからの相続
11.17 楽楽大学・ＴＳＵＫＵＢＡを語ろう
11.24 「ＤＸな日々～美んちゃんの場合」上映会
12.01 ブックトークカフェ
12.01 対話ファシリテーター育成講座
12.05 サロン ｄｅ ＢＯＹＡＫＩ
12.07 フォーカシング勉強会
12.07 ラフターヨガで一緒に笑って元気！
12.08 多様性に出会える図書館
12.14 歴史トークカフェ
12.15 いっしょに楽習会
12.21 市民の眼で見た海外の国ぐに
01.18 「いまこの瞬間に在り続ける事で満たされる私」を体感しよう！
01.19 ポエトリースクウェア
01.25 Ｔｈｅ Ｈｉｇｈ Ｐｅｒｆｏｒｍｅｒｓ Ｗｏｍａｎ
01.26 子どものやる気を引き出す魔法の質問
01.28 ガンジーに学ぶリーダーシップの旅
01.30 鍼灸師と歩く正しい歩き方講座
02.11 里山入門
02.23 一緒に走ろう伴走練習会
03.02 つくろう！科学の輪
03.08 フューチャーセッション・「わたしたちの公園」をつくる！
03.09 ファシリテーション・フォーラム実行委員会
03.16 あたりまえを疑えば世界はこんなにも豊かだ
03.18 今ここにある暮らしからつなげる未来